逆さまの蝶

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
逆さまの蝶

【Ｎコード】
Ｎ３６０８Ｌ

【作者名】
徳次郎

【あらすじ】
十七歳の誕生日、陽菜は道路に飛び出した子供をかばって、車にぶつかる。
軽い脳震盪と打撲で済んだ彼女だったが、病院のベッドで目覚める直前に、懐かしい声を聴いた。
麻野慶太…彼は、陽菜にとって忘れる事の出来ない存在だ。
中二の夏に死んだ彼の声が急に聞こえ始めた陽菜の毎日は、昔と変わってしまった自分への嫌悪と困惑に振り回される。

プロローグ・1（前書き）

久しぶりの投稿になります。
恋愛ファンタジー？なのですが…ジャンルは恋愛にしました。
少しゆっくり投稿する予定ですので、なんとなく読んでいただけたら幸いです。

プロローグ・1

梅雨が明けると極暑の夏空が広がって、陽炎で霞む高層ビルの向こうに入道雲が見えた。
海風は熱を含んで、高速湾岸線と国道３５７の間を吹き抜けてくる。
「ちょーかったるいよ。海が間近なのに、何が哀しくて山に行くの？」
「しょうがないじゃん。林間学校って言うのは、たいてい山のほうに行くんだから」
「めんどうくさーい」
由木陽菜（ゆうき ひな）は、やたらとぼやきの多い親友、朋平美智（ともひら みち）の愚痴を聞きながら朝の夏風に吹かれていた。
美智はスクールバッグを意味も無く振り回す。
「ヒナは優等生だからね」
「そんな事ないよ」
陽菜もつられてバックを揺らした。
国道３５７は高速湾岸線と並走して、お台場から習志野まで続いている。
幕張駅の近くの県立朝日が丘西中の二年生は、決まって毎年夏休み初日を含む三日間、林間学校を予定している。
当然のように夏休みを三日間失うわけだから、ぼやく生徒がいても仕方ない。
「そりゃヒナはさ、慶太も一緒だからいいだろうけど」
美智が少し意地悪な笑顔で言う。
「そ、そんなの……慶太なんて関係ないよ」
「またまた強がり言っちゃって」
校舎の向こうに高速湾岸線が見えるその向こうに細長く聳えるビル。

マリンスタジアムの歓声までは聞こえはしないが、海風は夏の喧騒を運んでくる。
正門をくぐって、ヒナはグラウンドに目を向けた。
慶太が走っている。
サッカーコートの中を、ボールが足にへばりついているかのように走る。
何人かが駆け寄ってボールを奪おうとしているが、慶太の足にくっついたボールは彼の意のままに、前後左右に不思議な動きをして、それでも彼の足から離れようとはしない。
「ほらっ、また見た」
「な、何が」
「朝はいっつも慶太チェック」美智が笑う。
「そんな事無いってば」
ヒナは美智に身体をぶつけると、その勢いで昇降口へ駆け出した。

＊　＊　＊

高速を使ってバスで三時間。茨城県の山中に山荘が並ぶこの場所は、大学の体育部がよく合宿を行う場所でも在る。
朝日が丘西中学校がここへ着いたのは、夏休み初日にあたる七月十九日だった。
辺りは森林に囲まれて、近くを川が流れる。
山荘の裏にはテニスコートもあって、小さな林を挟んだ向こう側には有名体育大学の合宿用コテージが見える。
西中の二年生は五クラス。陽菜のいる四組と慶太のいる五組はこの山荘へ、他の一組から三組までは川向こうの別の山荘へ向った。
それほど大きくは無い山荘だから、全学年が一箇所で合宿する事はできない。
全盛期は八クラス在ったから、それぞれ四箇所に分かれたらしい

が、いまはひとクラスの人数も少なく、二箇所に分かれるだけになる。

山荘と言っても、それなりに大きな建物だった。
洋館を思わせるコの字型の二階建ての建物は、バブル期にホテルロッジとして経営されていたが、十年以上前に市に買い取られてこういった学校行事やイベント事などに格安で使われているらしい。
誰もいないフロントのカウンターは今でも健在だが、管理会社との連絡用電話機が在るだけで他には何も入っていない棚が並んでいるだけ。
フロント奥のスタッフ休憩室だったであろう小部屋は、引率教員のミーティングルームとなる。
部屋は全部で二十室あり、生徒に割り当てられるのは全部で十六室。
二人部屋だったはずの場所に四人ずつ入れられ、大部屋は教員が分かれて使う。

初日の日中は野外炊飯のみ。
河原へ出て、鍋釜で料理をしてみんなで食べる。
その後、夕方までは自由行動だった。
「こんな場所で自由行動とか言われてもねぇ」
美智が木陰に入って顔を手のひらでひらひらと扇ぐ。
「いいじゃん。のんびりできてさ」
陽菜は木陰から蒼い空を見上げた。
緑の山の向こうに白い雲が大きくせり出している。
蝉の声が、空に向かって鳴り響く。
「何おばちゃんみたいな事言ってんのよ、ヒナ。あたしらにのんびりなんていいの」
辺りには、同じく暇を持て余した生徒たちがウロウロして行き場を探している。

「ヒナっ」
白樺の木陰から声がした。
美智の方が先に振り返る「ほらヒナ、麻野が呼んでるよ」
麻野慶太がふらりと歩いてくる。
「麻野、タケとかと一緒じゃないの？」
美智が話しかける。
「いや、さっきまで一緒だったけど、なんだかあいつらテニスコートの方に行ったよ」
「あはは……なんか、目的は想像がつく……」
「テニスコート、だれか使ってんの？」
陽菜は木陰から出て、陽の光に目を細める。
「どっかの大学サークルが来てるんだって」
美智はそう言ってから慶太の腕をつついて
「あんたは行かないの？」
「行くかっ」
「本当は、行きたいくせに」
陽菜が拾った小枝を彼にぶつけて笑った。

プロローグ・１（後書き）

お読み頂き有難う御座います。
このお話はＳｗａｌｌｏｗｔａｉｌ　Ｂｕｔｔｅｒｆｌｙスワロウテイル・バタフライを書く前から執筆している由木陽菜のお話です。
最後までお付き合いいただければ幸いです。

プロローグ・2

遠くに浮かんだ三日月よりも、落ちてきそうな頭上の星屑たちが森を明るく照らしていた。
慶太は親友の杉原と夜中に部屋を抜け出すと、外壁の雨樋を伝って庭に出る。
彼はそのまま河原まで駆け抜けるつもりだったが、ふと振り返ると杉原が一階の壁に沿って忍び足で歩いていた。
「おい、スギ、どうした？」
慶太は小声で言う。
「ちょっと待ってくれ、由木にも声かけてみるよ」
「陽菜は行かねぇだろ」
「美智も誘えば行くって」
杉原は小さな小石を拾って、一階の角部屋窓に向って投げる。
コツンッと一回。
もう一回投げると、ゆっくりと窓が開いた。警戒しているのか人影は見えなかった。
杉原は窓越しに顔を出して
「ヤッホっ」
「ぎゃっ……」美智が一瞬声をだして自分の手で口を塞ぐと小声に戻り
「びっくりしたなぁ、もう。なによ、スギ」
「花火やるけど、行かない？」
窓から部屋の奥を覗くと、トランプを片手に由木陽菜の姿があった。しかし、四人いるはずの部屋には、他にひと気がない。
「他の二人は？」
「知らない、どっか行ってる」
「じゃぁ、お前らも行こうぜ」
「あと誰いるの？」

「俺がいるって事は、慶太に決まってるだろ」
美智の気持ちは決まっていた。
振り返って陽菜を誘う。
「もう　消灯の時間だよ」陽菜は小さく首を振った。
「大丈夫だよ、どうせ消灯時間になんて、みんな寝ないから」
美智は二人分の靴を手に、無理やり陽菜の手を引くと、一緒に窓から出た。

夜の河原はひんやりと冷たい風が吹いていた。川のせせらぎに虫の声が聞こえる。
星の瞬きが、川の流れと大氣を照らしていた。
「ねえ、あれ蛍じゃない？」
陽菜が声を出す。
「どれ？　どこ？」
美智が目を凝らす。
「ほら、向こう岸」陽菜が指差すと、杉原も慶太も一緒に目を凝らした。
確かに川の向こう岸の長い水草付近を光る物体が浮遊してる。微かに点滅して、まるでクリスマスの飾り電球のようだ。
「すげー、俺初めて蛍みた」
杉原は高揚した声を上げると、慶太の背中を意味も無く叩く。
「あたしもっ、なま蛍初めて」
美智はピョンピョン跳ねて、杉原の腕を叩く。
慶太は一歩前に出て、陽菜と肩を並べた。背の小さな陽菜は、慶太の肩のあたりに頭が来る。
既に入浴を済ませているせいか、女性用の甘いシャンプーの香気（かおり）が夜風にほんのりと鼻孔をくすぐった。
陽菜は慶太の肩を頬に感じながら、点滅して浮遊する物体を見つめていた。

「あたしたち、先に行ってるから」
花火を楽しんだ後、美智が杉原の腕を掴んで歩き出す。
「なんだよ、お前ら……ゴミ拾っていけよ」
慶太が小声で叫んだ。しかし、二人は林の間をどんどん歩いてゆく。
陽菜と慶太は仕方なく、二人で花火の残骸を拾ってコンビニ袋に入れた。
慶太がコンビニ袋の取っ手を結んで肩をすくめる「しょうがねぇな、アイツら」
「気を使ってくれてるんじゃない？」
陽菜は星空を見上げる。そんな彼女の横顔を覗き込んで慶太は
「何に？」
「な……何にだろうね」
陽菜は急に膨れっ面で歩き出す。
「おい、待てよ。どうしたんだよ」
足早になる陽菜の後を追って、慶太は直ぐに彼女の横に並んだ。
「アイツらって、微妙にできてんの？」
陽菜は慶太の腕に、小さな拳でパンチした。
「そんなわけないでしょ」
「なんだよ、何急にヒネクレてんの？」
「別に、ヒネクレてないもん」
陽菜はさらに足早になる。
「なんだよ」
慶太は彼女の小さな背中を見失わないように、一定の距離を置いて歩いた。

プロローグ・3

翌日も朝から暑かった。
木陰を抜ける風は涼しかったが、強い陽射しはギラギラと川の揺らぎに映りこんだ。
生徒のほとんどは、昼食の野外炊飯の合間に川へ入って涼んだ。
何人かの先生も、たまらずジャージを膝までまくって川に入る姿もあった。
昼食時間が終わると、再び川に入る生徒も多かった。
「美智、カニいる」
陽菜もジャージを膝までまくって水に入って、ジャブジャブと川の浅瀬を歩き回る。
「あっ、本当だ。ヒナ、捕まえな」
「やだよ、怖いもん」
小枝を拾って、美智がカニをつつく。
迷惑そうに、カニは横歩きを始めた。
波打つ水面に映る太陽が、突然蔭ったのに気付いて、陽菜は空を見上げる。
美智もつられて虚空を仰いだ。
いつの間に現れたのか、大きな雲が太陽をすっぽりと覆っていた。
まだ青空は見えるが、西側には黒い雲が広がっている。
「変な雲行きだね」
美智が呟いた。
陽射しが隠れても暑かった。だから、少々天候が崩れても気にする者は少なかった。
「雨がきそうだな」
遠くで教師の声がした。
「少し早めに切り上げましょうか」
隣り合って立つ教師が応える。

青空の切れ間に、雷鳴が響く。
「うおっ、カミナリ」
「ヤダ、なんかすごい音じゃない？　近くない？」
空を見上げた生徒が声をだす。
再び雷鳴が聞こえる。
近くは無いが、低く響き渡る不吉な音となって地上へ轟く。
直ぐに雨粒が落ちてきた。
雨を嫌って木陰に女子生徒が素早く入り込む。川幅は二十メートル以上あるが、ほとんどが浅瀬で、中ほどまで歩いて入っていた生徒も川岸に向って歩き出す。
雨をそれほど気にしない連中は、特に急ぐ素振りは無かった。
陽菜はそれほど気にならなかったが、美智は「あめ、あめ」と言って足を早めた。
「慌てると危ないよ。美智」
陽菜が後を追う。
その時、美智が川底に出張った石に躓いた。
「きゃっ」
ジャバッと膝を着く「うわぁ、さいあくぅ」
「ほら、慌てるからだよ。きっと通り雨だよ」
陽菜は美智の腕を掴んで空を見上げる。
一瞬止んだかに思えるほど、小雨はさらに弱くなった。
陽射しが射した。
川岸に向う連中も、急ぐのを止めた。
川岸から木陰に入ろうとしていた生徒も、なぁんだ。と向き直ったり。
その直後、大粒の雨がザーッと落ちてきた。あまりの凄さに、一瞬で景色が煙る。
「きゃー」「うわっ、最悪っ」
方々から叫び声が聞こえるが、そのどれもに行楽独特というべき高揚感が混じっていた。

川岸にいた教師は、霞んで見えなくなった生徒に
「川から早く上がれ！」
「早く川から上がりなさい。焦んないで」
集中豪雨は時に、人の想像を遥かに超える場合が在る。しかし、それに遭遇するのはごく稀な為、誰もがそれを予想できない。
「もうずぶ濡れだから、関係ねぇな」
激しい雨音の中に声がする。
慶太と杉原がブラブラと歩いて雑木林に向っていた。
「由木と美智って、川ん中にいたけど、大丈夫かな？」
杉原が振り返ると、慶太も振り返って豪雨に霞む川辺を見た。
「大丈夫だろ」

教師は、煙る川の中に目を凝らした。微かな人影が近づいては奇声だけが耳に響く。川岸へ生徒が駆け足で上がってゆく。
四組の担任教師が、水位の異常な変化に気付いていた。
僅か数分で自分もずぶ濡れだったが、川から目が離せなかった。
大きな石の上にいたはずの自分の足は、もう川水に浸っている。異常な水位の上がり方だ。浅瀬だった川の中腹はどうなっているのか？
豪雨に飛沫を上げる川の中腹は、目を凝らしてもよく見えなかった。

プロローグ・4

増水した川の流れは想像を遥かに越えたスピードで流れ始めていた。
大分川下から数人の生徒が岸に這い上がって来るのを見た教師が、重いジャージを震わせて走った。
「大丈夫か？　他にもまだいるか？」
「判んないです。あたしたち、水から上がるのに必死で」
女生徒のひとりが、半ベソで言う。
もうひとりは息を荒げたまま「まだ何人かいると思うよ」
黒い髪の毛がべっとりと頬に張り付いている。
教師は川の方を見る。豪雨と飛沫で景色は霞み、川の流れは大小の波を立てていた。
足元の川辺はどんどん広がってくる。
上半身が見える。生徒だ。
教師は川へ入って行った。
中学生の胸の辺りまで川の水は増水している。
「俺に掴まれ」
「ヒナが、ヒナが流されちゃったよ。早くヒナを」
教師に腕を掴まれた美智が泣きながら叫んだ。
「由木か……何処だ、何処にいる」
「そこではぐれたの。すぐそこ」
美智が振り返っても、そこに由木陽菜の姿はない。
「生徒がひとり流されたようです」
教師は岸に向って叫ぶ「この生徒を誰か」
もう、ひとり男性教師がざぶざぶと川へ入る。
「気をつけろ、この生徒を頼む」

「先生は？」
「由木が流されたようだ。少し探してみます」
「あぶないです」
「いいから、この生徒を」
後から来た教師は、美智の身体を抱えると、岸に上がった。流れが酷く、大人でも歩くのに苦労する。
尋常でない事態に気付いた生徒数人が、河沿いに移動していた。
「由木が流されたってさ」
「由木って……陽菜か？」
その時慶太は少し遅れて川岸の雑木林を足早に歩いていた。
川幅がみるみる広がるのを見て、豪雨の直前まで確かに川の中にいた陽菜の姿を探していた。
「陽菜ちゃん、川で流されたって」
琴柱（ことじま）ヒカリの声がした。声が高くて、普段はうるさいとしか感じないけれど、豪雨の騒音の中でそれは確かに聞こえた。
教師の集まる川岸は直ぐに見えた。
慶太は河原の石を蹴って、走った。
美智の姿が見える。
女性教師に肩を抱かれて雑木の影に促されている。
「陽菜は？」
「慶太、ごめん、ヒナとはぐれた。ヒナ、流されちゃって……ゴメン、ゴメンね。ゴメン……」
美智は再び泣き出した。
慶太は再び走り出していた。
「麻野、危ないから木陰まで下がってろ！」
四組の担任が川岸で、水に入った教師の行方を見守っていた。慶太も視線をめぐらす。
あれだけ澄み切った川の水は、アマゾン川のように褐色に淀んで激流と化している。
「なんなんだよ、これ」

黒い影が遠くに見えた。学年主任の岩間だ。
身を呈して激流に入り、ひとりの生徒を必死で探す。しかし、教師の探す陽菜は、それよりも大分先にいたのだ。
慶太は教師の横をすり抜けて走った。
「麻野、何処行く？」
「あっちだ、陽菜はもっとあっちだよ」
相変わらず景色は煙っていた。
突然の豪雨が降り出して僅か十数分しか経っていなかった。
「麻野、川に入るな。戻れ！」
岩間が、川の中で叫んだ。
「先生、陽菜がいる。こっちだよ」
慶太は真っ直ぐに進んだ。
岩間は彼を制止させようとしたが、上手く身動きできない。
慶太はかまわず川を渡った。あっと言う間に胸まで水に浸かった。ジャージが重い。うまく歩けなかった。
それでも彼は、水に流れ乱れる陽菜の黒髪をしっかりと確認できた。
「陽菜っ」
陽菜は突き出た石にしがみ付いていた。自分の体力では、動いたら流される事を既に悟っていた。
「陽菜」
陽菜に辿り着いた慶太は、彼女の肩をしっかりと捕まえる。
「慶太……来てくれたんだ」
背の低い陽菜は、首まで水に浸かって目を開ける余裕はない。
「歩けるか？」
「駄目、手を離したら流されるよ」
「大丈夫だ、俺が支えるから」
「駄目だよ」
「大丈夫だって。俺、歩いてきたじゃん」
慶太は陽菜の身体を両腕で掴んだ。

「行くぞ。どんどん水が増えてるから、ここだって危ねぇよ」
慶太は陽菜の身体を強く引いた。二人で歩き出した途端、流れに阻まれて横によろめいた。
陽菜が慶太の身体にしがみつく。
「大丈夫だ、楽勝だよ。遊びだと思えば、行けるさ」
二人は流れに完全には逆らわず、斜めに川を横切った。思った以上に前に進む事は出来たが、岸までの距離は長くなってなかなか辿り着かない。
陽菜の足が、もう川底には着いていなかった。
水に浮かんでしがみつく彼女を、慶太が引っ張った。
増水は止まない。慶太はみるみるうちに体力を水に吸い取られた。
景色が煙る。
川辺は波打って、自分が何処にいるのか判らなくなった。
ただ、微かに人影の見える方向……それが岸辺だと確信して歩いた。
声がする。
担任の石川先生だ。まだ若いが、妙に威張るときが在る。嫌いではない。
「ゴメンね」陽菜が小さく呟いた。
「何が？」
慶太にしがみついた彼女の腕にキュッと力がはいる。慶太の足腰にも力が漲った。
川を渡りきれると確信した。
豪雨は耳鳴りとなって慶太の鼓膜に響いていた。
突然の豪雨が降り出して、まだ二十分も経っていないのに、川の地形はすっかり形を変えていた。

◆
◆
◆

鳥の囀りで目が覚めた。
窓から夏の陽射しと蝉時雨が降り注いでいた。
一度開きかけた瞼を、陽菜は再び閉じる。
「あ、眩しい？」
音楽教師の田中が、カーテンを閉める。
「ここ……？」
陽菜が再び目を開いて、周囲を覗う。
「病院よ。すぐふもとの総合病院」
教師は陽菜の髪の毛に触れると
「大分水飲んだみたいだけど、具合どう？」
「うん……気持ち悪い」
陽菜は部屋を少しだけ見渡す。ひとり部屋だ。
「慶太……麻野くんは？」
「……」一瞬の沈黙。しかし、田中は口を開いた。
「大丈夫だから、今は休みなさい」
教師とは思えないほどに、母親のような優しい眼差しの笑みだった。それなのに、瞳が微かに濡れている。
陽菜は自分でも知らないうちに、頬を涙が伝うのを感じた。

プロローグ・４（後書き）

お読み頂き有難う御座います。
やっとプロローグが終わって、次回から本編突入です（＾＾；

第1章―【1】（前書き）

本編に入ります。
のんびりとご鑑賞ください（＾＾

第1章―【1】

「ヒナってばうけるぅ。で？　あのオヤジどうしたの？」
「クロエのバック買ってもらった」
「マジで？」
「でもさ、ヴィトンのビキニまで買ってくれちゃって、一緒に海なんか行かねぇっての」
陽菜は、髪の毛に合わせて染めたブランの眉を上げて笑った。
「オヤジは思い込み激しいねぇ」
遠峰（とおみね）さやがポッキーを齧って高い笑い声を上げる。
高速道路の向こうに、夏雲が迫り出していた。
谷津高校は、習志野にある谷津干潟のすぐ近くに在る。産業道路と自然の残骸が交錯した中に、無邪気に揺れ動く制服姿が眩しい。
夕方のバス停は谷津高校の女生徒でいつも賑わい、少女の甘酸っぱい匂いの中に大人びたフレグランスの香気（かおり）がアンバランスに漂う。
「久々に浦安行く？」
「え～、ららぽーとでいい」
さやのポッキーに手を伸ばしたのは、皆上（みなかみ）あずさ。
ポッキーを咥えると、片脚を少し上げて紺色のハイソックスを両手でズリ上げる。
「あたしは今日、パスね」
「なんで？」
「なんとなく」
由木陽菜は、くるくるとゆるくカールした茶色の髪の毛を手でかき上げた。
「しかし、もう夏だねぇ」
さやが高速道路の向こうの青空に向って目を細める。
あずさと陽菜も同じ方を見上げ、マスカラで飾られた瞳をキュッ

と細めた。
「夏って事はさ、もう直ぐ期末テストって事でしょ」
「そうね……」
湾岸から吹く初夏の海風が、三人の短いスカートの裾をひらひらと揺らしていた。

撒き癖をつけたクネクネの茶色い髪が朝の風に揺れる。
夏服のブラウスは開襟シャツではなく、ごく普通の、胸に校章が刺繍された淡い水色シャツだ。その襟元を、第二ボタンまできっちりVの字に開ける。鎖骨が見えるくらい。
スカートはウエストで捲り上げたりしない。きっちり膝上２０センチに仕立て直す。もう逃げられないその寸法は、履いている彼女たちにもちょっぴり緊張感を与える。
紺色のハイソックスにも校章が入っているけれど、普通の市販品でも特に注意はされない。
だって、校章が左右外側にしかないから交互に履けない分、どちらかのつま先が直ぐに痛んでしまう。
こげ茶色のローファーがカツカツとアスファルトを踏み鳴らす。
駄目かと思いながら小走りにバス停まで来たら、ちょうどバスが来た。
バスは何時も遅れるから、コレぐらいでちょうどいい。
由木陽菜は朝日が丘のバス停から毎日バスに乗って、谷津干潟まで登校する。
学校が谷津干潟のすぐ隣だから、降りる停留所は谷津干潟。
自然公園の周囲は野鳥が飛び交って、東京湾とは思えない。そのくせ振り返れば、工業団地の群れが無機質に立ち並ぶ。
「おはよー」

満員のバスに途中から乗り込んでくるのは遠峰さや。高校に入ってからは、クラスが変わってもよく一緒に行動している。
彼女が髪をブラウンに染めたのも、最近ネイルに懲りだしたのも、たぶん陽菜の影響だ。
「暑っ」
さやが他校の生徒を掻き分けて、陽菜に近づく。少々カバンがぶつかっても気にしない。
「今日でやっと試験終わりだね。帰りどっか行く？」
「そうだね、昨日はだいぶ頑張ったし」
陽菜は自分の手でヒラヒラと顔を扇いだ。
「ヒナは優秀だからね。あたしなんて五日間ずっと頑張り通しだよ」
「あたしだって今回はちょっとヤバイよ」
陽菜が茶色い巻髪を手で触れたその時、バスが停車した。
習志野の男子校前にあるバス停に停まったのだ。乗客が一斉にうごめいて、数人が出口から降りてゆく。
陽菜の肩に誰かが触れて、彼女は少し驚きながら振り返る。
無造作に下ろした左手に何かが触れた。
小さな手紙。
「えっ？」
陽菜は再び驚いて手元に下ろした視線を上げた。
「ゴメン、良かったら返事ください」
陽菜が見上げた男子は、伏目がちに彼女をチラ見して通り過ぎた。
陽菜と一緒にさやがその男子を視線にとらえる。
「おぉ、けっこうカッコイイじゃん」
珍しい事ではなかった。
谷津高校は女子高で、近くには男子校。通学途中のバスでナンパされる事は珍しくない。
陽菜が経験から学習した事は、学校帰りに声をかけてくるのは比較的チャラ男で、朝は真面目くん。といっても真剣というより寧ろ、どこかストーカーっぽくて気持ち悪いやからが多い。

だからさやも思わず声を上げた。
陽菜は窓の外を眺め、同じ柄の制服の中からさっきの男を探し出して目で追った。
動き出したバスが揺れて、両脚でバランスをとりながら無言で小さな手紙を開いて視線を落とす。
名前とメルアドが書いてある。たいがいそれだけなのだが、あの男子生徒はちゃんと『付き合って欲しいので、よかったら返事下さい』と書いてあった。
大塔時（だいとうじ）　長道（おさみち）――なんだかすごい名前だった。
「なんかすごそう……」
さやが陽菜の手元を覗き込む「でも、ちょっとカッコよかったよね。金持ちっぽくない？」
「うぅん……よく見なかった」
陽菜は興味なさそうに窓の外を眺めた。
グオンッ、と大型バイクが隣の車線を勢いよく追い越してゆく。
アスファルトが溶け出すような、穂のかな夏の匂いがする。立ち並ぶ工業団地が陽炎で揺らいでいた。

第1章―【2】

「由木っ」
ららぽーとＴＯＫＹＯ　Ｂａｙの二階エントランスで声を掛けられて、陽菜は振り返った。
期末試験の最終日の放課後、陽菜は友人と共にブラブラとショッピングモールに立ち寄っていた。
並んで歩いていたさやとあずさも立ち止まって後ろを振り返る。
「だれ？」あずさが言った。
後ろから歩いてきたのは中学時代の同級生、杉原北星（すぎはらほくと）だった。
体格こそ昔のまま線は細いが、背は伸びて骨格がガッチリして、男らしくなっていた。
一緒にいたらしい仲間は、気を利かせて少し離れたようだった。
「久しぶりだな」
目尻にシワを寄せて笑うと、中学生のひとなつっこい彼がオーバーラップする。
「ああ……杉原」
陽菜は、何故か少し戸惑いがちに笑うと「元気？」
放課後に塗り直したマスカラが黒々と細く、笑みを演出する。
「ああ」杉原は小さく頷いた。
陽菜は杉原の後ろにチラリと視線を動かす。
彼の連れは、後ろでエントランスの手すりに身体を擡げて携帯電話を開く。
さやとあずさは、ちょうど目の前にあったベンチに腰掛けた。
彼女達の姿を杉原はチラリと見る。
「お前、変わったな。噂は聞いてたけど」
「噂って、なに？」
陽菜は小さく首を傾げて笑う。肩から胸に落ちる茶色い巻き髪を、

指で触れる。
「あちこちで、無茶してるって」
「そんな事してないよ。べつに普通だよ」
杉原は、陽菜の指先が触れる茶色い巻き髪を見つめた。
「そうかな……」
「そうだよ」
短いスカートが揺れる。
陽菜の近くは、イチゴのような桃のような、甘い香気(におい)で満たされていた。
あの頃……ほんのりとシャンプーの香りだけだった、少女の純白なイメージはもうない。
「やっぱ、変わったよ。由木」
杉原はエントランスを通り過ぎる他の学生たちを目で追った。
何処の高校も期末試験時期だから、ショッピングモールは行き交う型それぞれの制服であふれていた。
彼は、エントランスを支える大きな支柱に寄りかかる。
「あん時から、変わったんだよ」
陽菜は無意識に俯いていた。
「どうせ、あたしの人生はオマケなんだし。別にいいじゃん」
「オマケとか言うなよ。慶太がどんな思いでお前を……」
「うるさいな。何にも知らないくせに適当な事言わないでよ」
杉原の言葉を、陽菜は遮った。
ベンチで話しをしていたさやとあずさが、微かに荒げる陽菜の声に反応して振り向く。
エントランスの手すりに寄りかかっていた杉原の連れも、遠目で二人に視線を向ける。
「でもさ……あんまり、オヤジとかには手ぇ出すなよ」
杉原は陽菜に背を向けて歩き出すと、連れの友達に小さく『行こうぜ』と目配せした。
「別にしてねえよ」

陽菜は、去ってゆく背中に声を投げつけた「なんにも知らないくせに！」

「今の誰？」

再び歩き出した時、あずさが陽菜に訊く。

「中学の同級生」

「ふぅん」あずさが頷く。

「ちょっとイイ男だよね」

さやが笑って、背中にダラリと背負ったカバンのストラップを両手で掴む。

陽菜は何も言わなかった。そして何も無かったように

「ねぇ、あたしお腹すいた。なんか食べよ」

「うん。あたしも腹へったぁ」

さやとあずさが声を合わせて、正面に見えるロッテリアを指差した。

帰りは電車で帰って来た。

幕張の駅を出て、陽菜は独りゆるゆると歩き出す。

手を繋いだ高校生カップルが、仲睦まじく歩いてゆくのを目で追った。

もし……慶太が生きていたら、自分も何処か初々しい姿でちょっぴり浮かれた気分であんな風に手を繋いで歩いたりしたのだろうか。

潮の香りを含んだ風が、彼女の巻き髪を揺らした。炎天に落ちた影が、ゆらゆらと揺れる。

ふと顔を上げると小学生が二人、自転車で走って来て交差点で停まった。

陽菜はその交差点を渡る為、歩き続けていた。陽炎で横断歩道の白線が揺らいでいる。

車通りは少なかった。少なかったから、彼は動いたのだ。小学生

の一人が、横断歩道の赤信号を無視して前へ進んだ。
友達が何かを叫んでいる。
信号無視で進んだ少年は、何処か得意げに友達を振り返る。
交差点の直ぐ先はカーブしていて見通しが悪い。
陽菜の目にトラックが見えた。
叫び続ける友人の声が何を意味しているのか少年は気付いて、視線を移した。振り返った時、トラックがクラクションを鳴らす。
少年の身体は硬直して、その場から動く事は出来ない。
陽菜は自分でも知らぬ間に走っていた。短いスカートが捲くれ上がる。太股の筋肉が久しぶりに張った。
トラックの急ブレーキに、周囲の人波は一斉に振り返る。
海風が運んでくる白い砂の浮いたアスファルトに、トラックのタイヤがズザザっと鳴った。
オモチャをコンクリートに落っことしたような、ガシャンという音。それはあまりにショボくてあっけなくて、取り返しのつかない響き。
「おい、ヤバくねぇ」
少し離れた場所で、高校生の二人組みが声を出した。
炎天下の暑いアスファルトの上には陽炎が立ち上って、ひしゃげて倒れた自転車と子供と、陽菜の身体が転がっていた。

第1章―【3】

サイレンの音がうるさかった。それが、自分の乗っている車から発せられている事に気付いた時、再び意識は朦朧とした。
窓から暖かな風が吹いて心地いい。そんな風に感じるのは久しぶりだった。
少し雨の匂いがする。
――雨、降ってたっけ？
コンクリートの湿った匂い。河原の石のような匂い。
「陽菜、陽菜」
遠くで声がした。
それは、とても懐かしい声だった。
小学二年生の春に初めて逢ってから、おそらくずっと好きだった人の声。少し意地悪で鈍感で、でも優しくて。
当時静岡から転校して来た陽菜は、学校でなかなか友達をつくれないでいた。そんな時、学校帰りに声をかけてくれたのが、麻野慶太だった。
「陽菜、陽菜」
懐かしい声は、何処から聞こえるのか判らなかった。
暗闇の遥か彼方から聞こえるような気もするし、頭の中から響いてくるような気もする。
外の空気を伝って、遠い昊天（そら）から耳に届いてくるような気もする。
陽菜は意識が戻った事に自分で気付いた。気付いて少しの間、耳を澄ました。
この声は、何処から聞こえるのだろう……鼓膜を伝っているのでない気がする。
陽菜はそっと瞼を開く。
少し眩しいけれど、霞んだ天井はすぐに鮮明に浮かび上がった。

「陽菜？　気がついたのね」
さっきとは違う声がした。
陽菜は確かめるように、ゆっくりと小さく首を動かして、今聞こえた声の主を見つめる。
「大丈夫？　判る？　陽菜」
母親だった。
ベッドサイドに座っていたのだろう、中腰に立ち上がって陽菜の顔を覗きこんでいた。
「あんた、子供助けたんだって？」
母親は、少し疑心な笑みを浮かべる。
「そう……だっけ」
陽菜は小さく応えた。
頬っぺたにガーゼがくっついている事に気付いて、手で触れてみる。右手の甲にも包帯が巻かれていた。
「あちこち擦りむいたのよ。昨日から眠ったままだったの」
母親は何時も通り優しかった。
高校に入って直ぐに髪をカラーリングした彼女に、母親は何も言わなかった。
家に帰る時間が遅くなっても、両手の爪にネイルをしても、両耳に18金のピアスをしても、母親は自分の何かを見透かしているような笑みで、いつも「お帰りなさい」と迎えてくれる。
「雨、降ったんだね」
「そ、そうね。夜中から今朝方までけっこう降ってたよ」
陽菜は窓の外に目を向けた。
高いマンションの間から、遠くに高速湾岸線が見える。空は白く霞んでいた。
「少し、眠るね」
陽菜はそう言って再び瞼を閉じた。
「大丈夫？　脳震盪だって、先生が言ってたから。具合、悪くない？」

「うん。大丈夫みたい」
陽菜は母親の問いに、目を閉じたまま頷いた。
遠くで聞こえたあの声は、母親ではなかった。確かに懐かしい彼の声だった。
また聞こえないだろうか。また、聞きたい。
陽菜はゆっくりと再び、眠りについた。
窓から静かに注ぎ込む夏風は、頬に優しく心地よかった。

夕方には退院した。午後の早い時間に、陽菜の助けた少年と母親が菓子折りを持って彼女の病室を訪れた。
陽菜はあの瞬間の記憶があまり無くて、ピンと来ないままただ愛想笑いを浮かべて子供に付き添ってきた母親の謝罪を聞いていた。
二日ぶりに帰った自分の家が、大分懐かしく感じた。
直ぐに自分の部屋に入って、白い壁紙などを見つめる。何も変わりは無い。試験の最終日の朝、学校へ行く前と同じだ。
携帯電話が鳴り、陽菜はその液晶画面を確認してから電話に出る。
「ヒナーッ、どうしたよ。大丈夫なの？」
さやだった。
「うん、何とか平気」
「ビックリしたよ。あんた子供助けたんだって？」
「自分でもあんまり覚えてないんだけど……そうらしい」
「ヒーローだね」
「そんな事ないってば」
さやは人助けした陽菜を絶賛した。彼女達の周囲では、非常に珍しい行為なのだろう。
誰かに迷惑はかけても、誰かを助ける事なんてないだろうと、誰もが思っているようだ。
「入院したって言うから、心配したよ」
さやは電話の向こうでひとり、高揚している。

「なんか気絶したみたでさ、今朝目が覚めたのよ」
「ほんとに大丈夫なの？　そんなんでさ」
「大丈夫だよ。何でもないもん」
陽菜はベッドにドッと腰掛けると
「頬っぺた擦りむいたけど」
「マジ？　頬っぺた。ヤバいじゃん、顔」
「こんなの、直ぐに治るよ」
「乙女の頬っぺたは大事だよ」
さやが笑う。
「別にぃ」陽菜は乾いた声で応えた。
その後、たわいも無い会話で笑いながら電話を切った。
さやには「別に」と言ったものの、頬っぺたに貼ったガーゼが取れるまでは外に出るのはよそうと、陽菜は思った。

第1章―【3】（後書き）

お読みいただき、有難う御座います。
暇つぶしになれば、幸いです。

第1章―【4】

「陽菜、お風呂入るの？」
陽菜が洗面所に入る気配を感じた母親が、台所から声を出した。
「うん。だって気持ち悪い」
陽菜はそう言いながら、着替えを脱衣カゴに放り込む。
病院から帰って直ぐに着替えた時には気づかなかったけれど、両腕と両脚の膝にも小さな擦り傷と黒い痣があった。
「あっ、なんか痛いと思った……」
陽菜はひとり呟いて、下着のホックを外す。
浴室へ入ると最初に湯加減を手で確かめる。擦り傷に沁みないように、水道から水をジャージャー出して浴槽のお湯をぬるくした。
髪を洗って身体を洗って、ひと息ついて湯船に浸かると、思わずと息が零れる。
「ふぅ……」
キレイ好きの陽菜は、昔から一日たりとも入浴しない日が我慢できない。
風邪とか怪我とかでお風呂に入れない日は、それだけで憂鬱になる。
湿気で天井に溜まった湯気の雫が、湯船にぽたりと落ちた。
「陽菜、陽菜？」
声が聞こえた。
「け、慶太？」すぐに判った。
陽菜は何処から聞こえるか判らない声に、反射的に応える。
「陽菜、俺の声が聞こえるか？」
「うん……慶太、何処にいるの？」
陽菜はそう言ってから、急に自分の居場所を再度認識し、腕を伸ばしてタオルを取る。
湯船の上のほう、胸の周囲をタオルで覆った。

「慶太、何処？」
「わかんねぇ。俺も、ここが何処だかわかんねぇ」
「あ、あたしが見える？」
「いや、見えない。何も見えないんだ。ただ、ミルク色の霧が立ち込めているだけだ」
陽菜は浴室の壁や天井を見渡す。窓の外も、首を伸ばして覗う。誰の気配もない。それどころか、慶太は三年前からこの世にはもういないのだ。
なのに、どうして彼の声が急に聞こえるだろうか？　陽菜は困惑した。
「陽菜？　陽菜は今何処にいる？」
「えっ？　あ、あたしは……お、お風呂」
「風呂？　何で？」
「何でって、お風呂はお風呂じゃん」
陽菜は再び周囲を見回す「慶太、本当にこっちが見えないの？」
「見えねぇよ」
「覗いてんのかと思った」
そう言いながら陽菜は、湯船に潜り込むように身体を屈めた。
「じゃぁ、また後でいいや」
「えっ？　慶太？　慶太？」
陽菜が呼んだ。
「陽菜、誰と話してるの？　大丈夫？」
浴室の声が漏れていたのか、母親が心配して脱衣所から声をかけて来た。
「えっ、だ、大丈夫。何でもないよ」
「本当？　気分悪くなったら言いなさいね」
「大丈夫だよ。もう上がるから」
母親の気配が遠のいてから、陽菜はもう一度浴室の中を見渡した。
湯気が天井を濡らしている。
浴槽に立ち上がって、すりガラスの窓をそっと開ける。

夏の夜気が、どんよりと広がっているだけだ。帳には、虫の声が響いている。

「だいぶ頭打ったのかなぁ……」

陽菜は自室に入ると、ドライヤーで髪の毛を乾かしながら呟いた。

慶太はもういない。

三年前の夏、氾濫した川から自分を助け出す為に力尽きて、身代わりにこの世を去ってしまった。

残りの中学生生活は地獄だった。罪悪感に苛まれた日々は、ただ繰り返すだけの無意味な時間との戦いだ。

陽菜は高校に入って変わった。

自分を変えなければ生きてゆけないような気がした。

艶のある黒髪を、躊躇なく染めた。

両耳にピアスの穴を開けて、毎朝マスカラを塗って、学校と放課後用の塗り分けができるようにもなった。

アナスイの甘いフレグランスを使うようになったのも、高校に入ってからだ。

長い髪の毛を片手ですくいながら、ドライヤーを当てる。

手に絡みつくような湿った髪が、次第に重さを失ってゆく。

夕食前に風呂に入るのなんて、大分久しぶりだった。

台所の食卓に行くと、弟の大知(だいち)が部活から帰って来ていて、ご飯を頬張っていた。

「ネェちゃん大丈夫だった？」

「うん。まぁ、平気」

陽菜は彼を見ずに、自分の席に座る。

「頬の擦り傷、ガーゼ貼りなおす？」

母親は味噌汁を陽菜の前に置いて言った。

「別にいいよ」
入浴前に頬のガーゼを剥がしたから、紅い擦り傷が痛々しく露になっている。
「ネェちゃんが子供助けるなんて、チョーびっくりだよね」
言葉に悪気は無いのだが、母親は大知の言葉に苦笑した。
「お姉ちゃんだって、人くらい助けるわよ」
陽菜は黙々と卵焼きやエビフライに箸を伸ばしては小さな口へ運ぶ。
「大知、帰ったら着替えな」
「何でだよ、めんどくせぇ」
大知は中学でサッカー部に入っている。そのユニホームは三年前と変わりなく、慶太が着ていたものと同じデザインだ。
ユニホームでなくとも、弟の運動着姿を見るたびに、陽菜は彼を微かに思い出して焦燥する。
陽菜は早々に食事を切り上げると、席を立つ。
「もういいの？」
母親が箸を止めた。
「うん。今日は早く寝る」
「ちょっと待って」
母親が冷蔵庫から何かを持ってくる。四角い箱に入っているのは、近所のアンジェリーナというケーキ屋の箱だ。
笑顔の母が箱を開けると、真っ白なホイップクリームが眩しい。
「昨日、あんた誕生日でしょ。買って置いたのよ」
「あぁ……そうだった」
陽菜は椅子に座りなおすと「すっかり忘れてた」
とりあえずケーキは食べた。
せっかく母が買ってくれたケーキを無下にもできなかったし、上に乗っかっていた巨大イチゴをどうしても食べたくなった。
それでも弟の大知の方が、彼女の倍は食べていたのだけれど。

陽菜は台所を出ると、ゆっくりと階段を上った。やっぱり頭が少しクラクラするような気がする。

「お風呂、ヤバかったかな……」

溜息をついて陽菜はベッドに腰掛けると、そのまま脚を上げて横たわった。

彼の声が、静かに脳裏でリフレインする。

第1章―【5】

うとうとしていた。ベッドに横たわったままどろみ、陽菜は浅い眠りの中に溶け込んでいた。
「陽菜、陽菜」
「ううん……慶太……」
「陽菜？　どうした、大丈夫か」
陽菜は確かに聞こえる声に反応して、目を見開いた。
上半身を勢いよく起こす。
「け、慶太？」
「ああ、さっきも話したろ」
「やっぱり……」
陽菜は少し乱れた茶色の髪をかき上げると
「頭打ちすぎた」
「何騒いでんだよ」
再び慶太の声。
陽菜は天井を見上げて「慶太？　なんで？」
「わかんねぇ」
「何処にいるの？」
「さっきも言ったろ。わかんねぇよ」
陽菜は周囲を見渡して、ベッドから起き上がると、勉強机の椅子に腰掛けた。
「信じらんない……なんで……慶太、死んじゃったんだよ」
「そうらしいな」
「いままで何処にいたの？」
「どこって、俺気付いたら今だぜ。お前を助けたのはほんのついさっき、て感じさ」
「あれからもう、三年経つんだよ」
「そんなに経つのか」

慶太の声が少し途切れた。
「じゃあ、お前もう高校二年生なのか？」
「そうだよ」
陽菜は何処を見ていいのか判らず、立ち上がって窓のカーテンをあける。
夜空に星は見えないけれど、明るい月が浮かんでいた。

「元気なのか？」
慶太が言った。
「う、うん……ちょっと怪我してるけど」
「なんで？」
「うん、ちょっと転んで」
陽菜は机の椅子に座ったまま、両脚をぶらぶらと揺すった。
「お前、意外とそそっかしいからな」慶太の軽い笑い声。
――懐かしい。
「なによ、そんな事ないもん」
彼女は天井を見上げる。
何となく、そっちの方から慶太の声が聞こえるような気がした。
「慶太は、元気……なわけないよ、ね……」
陽菜は尻すぼみに声を消す。
「まあ、どうなのかな。痛くもかゆくも、気持ち悪くも無いけど」
慶太が明るく言う。彼がどういう状況にいるのかまったく想像できないから、陽菜は少し困惑した。
「少し眠くなったから、またな」
「えっ、うん……じゃぁ、またね」
陽菜は再び辺りを見渡す。
もう、慶太の声は聞こえなかった。
陽菜は再び立ち上がってカーテンの外を覗く。
遠くに幕張ビルの航空誘導等が紅くゆっくりと点滅していた。

朝から気温は夏日に達していた。陽菜は寝汗と共に目を覚ます。
「うぐぐぐ……」
唸るように小さく声をだして、ゴロリと寝返りをうって、タオルケットを蹴飛ばした。
羽毛の枕に顔を半分押し付けたまま、目を開ける「あっ……」
昨夜の事を思い出す。
夢だったのだろうか？
いや、確かに慶太と話しをした。しっかりと、何度も言葉を交わした。
そんな事があるだろうか。
三年も前に死んでしまった人の声が聞こえるなんて。しかも、まるで何処かその辺にいるように、ケータイで話しているように。

台所に降りると、父親が朝食を食べていた。
仕事で帰りが遅い父親とは滅多に夕食を共にしないし、ましてや朝食だってほとんど一緒になる事は無い。
もちろん、父親よりも陽菜の方が夜遅い時間に帰る事もあるのだけれど。
とにかく高校に行くようになってから、どんどん父親との距離は遠のいてゆくし、髪の毛を茶色に染めてマスカラを塗る娘に、父親は興味が無いようだった。
「ねえ」陽菜はトーストにソフトマーガリンを塗りながら、伏せ目がちに父親をチラ見する。
「ねえってば」
「ん？　俺に言ってんのか？」
母親が大知の弁当をつめながら様子を盗み見る。久しぶりの父娘（おやこ）

の会話だ。
「目の前にいんの、お父さんだけじゃん」
陽菜は、マーガリンを塗ったトーストをいったん皿に置く。
「人って、死んだらどうなるのかな？」
父親はコーヒーカップを口へ着けたまま停まった。
麻野慶太が陽菜を助ける為に命を落としてから、この家でも死というキーワードは暗黙のうちにできるだけ使わないようになっていた。
「どうしたんだ、急に？」
父親がコーヒーカップを置く。
「うん……なんとなく」
陽菜は、皿からトーストを持ち上げて、齧った。
「一昨日、子供を助けたんだって？」
「う、うん」
「よかったじゃないか、怪我だけですんで」
父親はチラリと陽菜を見た。久しぶりに見るスッピンの娘の顔は、頬に痛々しい擦り傷があるかわりに、初々しくて少し眩しい。
それを悟られないように無関心な素振りを見せる。
「うん……じゃなくて、死んだらさ……」
陽菜は話題をぶり返す。
「どうしたの？」
母親が大知の弁当を包みながら、陽菜に近づくと
「天国とか、そういう答がほしいの？」
「そうじゃないよ。もっと科学的な根拠に基づくようなさ」
陽菜が母親を振り返る。
「科学的根拠？」母親は困惑して眉を潜めて笑う。
「炭素だろ」父親がボソリと言ってコーヒーカップを再び持ち上げる。
「死んで火葬されたら、炭と灰になる。それだけだ」
陽菜は父親に向き直って「それは身体の話でしょ」

「それ以外に何がある？」
陽菜はトーストの残りを小さくちぎって口へ運ぶ。
「魂っていうか、なんていうか……」
父親はコーヒーを飲み干すと「なんか映画でも観たのか？」
そう言って立ち上がり「じゃぁ、行くぞ」
ビジネスカバンを手に、玄関へ歩き出した。
陽菜は父親の背中を見送って、ミルクをたっぷり入れたコーヒーを啜った。

第1章―【5】（後書き）

お読み頂き有難う御座います。
引き続きお付き合いいただければ幸いです。
宜しくお願いいたします。

第1章―【6】

一日中家でゴロゴロしていた。
部屋でテレビを見て、本棚から掘り出したハチミツとクローバーを全巻読んで、それでも時間は有り余る。
少し、頬っぺたのキズがヒリヒリする。
「あぁ、退屈」
ベッドの上で、ゴロゴロと寝返りを繰り返す。
陽菜はピョンとベッドから起き上がると部屋を出た。台所に下りて、グラスに麦茶を注ぐ。
小学生の騒がしい声がした。学校が早く終わったらしく、初夏の陽射しがガラスに弾けるような笑い声が、吹き抜ける風のように裏手の路地を通り過ぎてゆく。
彼女は冷蔵庫から麦茶のボトルを取り出すと、大き目のグラスに注いで手に取った。
指先と手のひらに冷んやりとした冷たい雫の感触が沁みる。
「陽菜、陽菜」
声がした。
「慶太？」
麦茶の入ったグラスを、彼女はテーブルに置いた。

「そうか、三年も経ったって事は、陽菜は高校生なんだな」
「うん……」
「何処の高校に行ったんだ？　お前頭いいから、成北（せいほく）か？　城南（じょうなん）か？」
「う、ううん」
陽菜は麦茶の入ったグラスを再び手に取ると

「谷津高校だよ」
「谷津？　谷津かぁ……あそこ、派手な女多いから、お前浮いてないのか？　黒髪の方が少ねぇよな」
陽菜は茶色い艶を発する自分の髪を指先で撫でながら
「う、ううん……何とかやってるよ」
陽菜はリビングに移って、大きな窓から庭を眺めた。茎を伸ばしたライラックの周りには雑草が茂り、青葉の匂いがする。
母親は出かけているのか家の中に誰の気配もなく、留まった空気がしんと静まり返っていた。
小さな庭にある花壇に、マリーゴールドの花が陽射しをあびている。
「そうか。お前もケバくなってたりしてな」
慶太は小さく笑った。
まるでケータイで話ているようだ。違うのは声が頭の中に直接響いてくる事。
今気付いた。
彼の声は、耳の鼓膜を通して聞こえてくるのではない。もっと意識の奥深い所で、直接頭の中に響いてくる。だから、気絶して病院のベッドに寝ている時も、鮮明に声が届いたのだ。
「そんな……そんな事ないよ。あたしは……前と変わんないよ」
陽菜は髪に触れていた片手を離して、グラスの麦茶をグッと飲んだ。
「慶太は？　あんたはいったい、今何処にいるの？」
「さあな。昨日も言ったけど、俺にもわかんねぇ。陽菜から遠い所なのか、すぐ近くなのか、判んないんだ。ただ声が届きそうな時って、お前の気配がすぐそこに在る気がする」
「そっか……でも……慶太は、今も中学生ってこと？」
「どうだろうな。死んだ人間は、その人を心に留めて生きている現世の人と一緒に年をとるって聞いたことが在るよ。昔、婆ちゃんから」

「心に留めて生きる人と一緒に？」
「お前も、俺を心に留めてる？」
彼は照れ隠しにハハッと笑う。
陽菜は再び麦茶を飲む。
「さあ、どうかしら」
フフッと笑った。
確かに、慶太の話し方は昔のままだけれど、年下になったという感じはない。
それはきっと、自分と共に年をとったからなのかもしれないと、陽菜は思った。
「あたしが思わなくても、慶太のご両親が心に留めてるよ」
「まぁ、そりゃそうだろうけどさ」
「ご両親とは？　おばさんとは話ししたの？」
彼と話していると、どうしてだろう、昔の話し方になってしまう。
今よりももっと清楚で上品で粗雑さの欠片も無く、薄いガラスのように繊細な気持ちが蘇える。
夏の陽射しが庭を満たしている。緑の雑草が、門扉の両脇を青々と占領していた。日を追うごとに本格的な夏が足早に近づいて来る。
遠くから蝉の声が聞こえた。
「声が届くのは、お前だけ。陽菜だけなんだ」
「えっ？　そうなの」
「妙だろ」慶太は再びハハッと笑う。
明るい笑い声。この世にいないとは思えない、無邪気な笑い声だった。
フフッと陽菜も思わず笑う「そうなんだ」
どうして自分には彼の声が聞こえるのだろう。
「少し休むから。またな」
「えっ、うん……」
家並みを越えて聞こえる蝉の声がいっそう激しくなった気がする。
「慶太？　慶太？」小さく呼んでみる。

慶太の声はもう聞こえなかった。

陽菜は自分の部屋に戻ると、床に立てかけた姿見を見つめた。

茶色い髪と両耳のピアス……慶太が知っているあの頃の由木陽菜はそこにはいなかった。

黒髪を伸ばして、体育の時には必ず二つ結びにお下げを作った。三つ編みなんて、もう二年以上した事も無い。

ベッドサイドの小さな鏡台に並んだマニュキア。無造作に置かれたファンデーションのケースとマスカラ。散乱したビューラーやシャドーブラシなどのメイク用具。

陽菜はベッドに腰掛けると、それらを眺めながら自分の茶色くてクルクルとよじれた髪の毛をぎゅっと掴んだ。

静かに溜息をつく。

部屋の空気が淀む気がした。

第2章―【1】

試験休みに入って五日が過ぎていた。陽菜は二日間病院にいたから、退院して三日が経った。

その間ほとんど外へは出なかった。

少し汗ばむと頬っぺたの擦り傷がヒリヒリして、外出する気になれない。近所のコンビニへ行くのがせいぜいで、あとはさややあずさと電話で少し話す程度だった。

階下でチャイムの音がした。

ベッドの上でゴロゴロして、本棚から取り出した桜井亜美の小説を手にしていた。小説なんて久しぶりに読む。

イメージ写真に活字をあてがった、比較的字の少ないやつだ。

どうせ何かの勧誘や集金だろうとチャイムはシカトしていたが、再び鳴る。さらに2度、一度で3回鳴る仕組みのチャイムが連打された。

「お母さんいないのかな？」

陽菜はダラダラとベッドから起き上がると、階段を下りる。

スリッパを引きずるように廊下を歩き、面倒臭そうに玄関のドアを開けると、久しぶりに見る顔がそこにあった。

「ひ、久しぶり……友達に聞いてさ、大丈夫なの？」

谷津高校で唯一、中学からの同級生である朋平美智（ともひらみち）だった。しかし、中学時代親しかった彼女とも、高校に入ってからはまったく行動を共にしていない。

一年の時からクラスが違ったし、彼女は陸上部に入って部活動をしている。

でも本当はそんな事が理由で彼女との付き合いをやめたわけではない。

「う、うん。平気だよ」

陽菜は少し驚いた顔を作り笑顔に変えて応える。
美智は、陽菜の頬に貼られたガーゼを見つめながら苦笑して
「そう……」
「わざわざ来なくたってよかったのに」
陽菜は肩から胸に落ちた巻き髪を手で触れた。
昔からの黒髪を今はショートカットにして、よく陽に焼けている美智。彼女の健康的に細い身体には、スキニージーンズがよく似合っていた。
ノースリーブのチェニックにサマーニットの黒いベスト。ヤッパリ高校生なんだと主張するように、柑橘系の爽やかなフレグランスの香りがした。
上下ジャージ姿の陽菜は、久しぶりに対面した彼女をマジマジと見る。
「陽菜と話すの、久しぶりだよね」
「美智は部活、忙しそうだからね」
「身体は大丈夫だったの？」
美智は、自分の頬っぺたを指差す。
「うん……こんだけ。あとアタマ思い切り打ったみたいだけど、なんか平気」
陽菜は腕まくりをして肘のすり傷を見せる。
「それと、あちこち擦り傷」
少しぎこちなく笑ってみせる。
「あはは、大変だ」美智の笑いも、どこかぎこちなかった。
中学の卒業式の時にはもう、あまり話しはしなかった。同じ高校に入った事も、入学式の時に見かけて初めて知った。
あの頃親しかった仲間とは、中学の後半からほとんど一緒にいないし、話もあまりしなかった。
彼だけを置き去りに、他のみんなとだけ元通りにはなれなかった。
慶太が自分の前から消えてしまったように、他の友達も陽菜は心から消し去り拒絶するようになった。

プライオリティーなど存在ない、無条件の拒絶だった。
小学校から仲のよかった彼女だけれど、今は当然のように会話は弾まない。彼を犠牲にしてしまった罪悪感が、静かに陽菜を変えていった。
「もうさ、せっかくの夏が台無しだよね」
陽菜はわざとらしく頬っぺたをガーゼの上から摩る。
「なんかさ、やっぱ陽菜だな。とか思ったよ、あたし」
「なんで？」
「だって、道路に飛び出した子供を助けて怪我するんだもん」
美智が笑う。
陽菜は笑いをやめた。
「あたしは……自分が死んでまで誰かを助けたりしないよ」
暑さを拒絶するような涼しげな声だった。
「そ、そういう意味で言ったんじゃ……」
国道から蝉の声が聞こえる。
陽菜は小さく昊天（そら）を仰いだ。
夏空から陽光がギラギラと二人を照らしつけていたが、流れる大きな雲がそれを遮って大きな影を落とすと風が冷たく感じた。
「お墓まいり行くの？」
「なんで？」
「もうすぐほら……命日だし」慶太の事だ。
「別にいつも行ってないし」
陽菜は再び髪の毛に手を触れると、指先で毛先をクルクルと巻く。再び降り注ぐ陽射しを浴びても、髪は不健康に渋く輝くだけだ。
「行ってないの？」
「美智は行ってるの？」
「うん……杉原も毎年行ってるよ」
「そう……」
陽菜は眩しそうに家並みを眺めて
「じゃぁ、なおさら大丈夫じゃん。あたしが行かなくても、みんな

が行けばオーケーじゃん」
遠くを見つめながら笑った。空虚な笑み。
空回りするような、乾いた笑い。
「そう言う問題じゃ……」
「ごめん……まだちょっと疲れてるから」
陽菜は美智に向かって目を細めて笑う。
「う、うん。じゃあ、お大事に」
美智は困惑した笑みで陽菜を見つめると、右手を上げ『バイバイ』と胸元で小さく手を振った。
陽菜も小さく右手を上げて振る。最後にちょっとだけカラ元気な笑顔をおくる。
雑草の生い茂った門扉をくぐって歩いてゆく美智の後姿を、陽菜は少しだけ見送った。
短い襟足から伸びる細い首筋に、中学時代のままの彼女を感じて、少しだけ羨ましくなった。
鬱屈した思いが込み上げると同時に、きゅんと、胸が苦しくなる。

第2章―【2】（前書き）

今週はちょっと遅れてしまいました。

第2章―【2】

試験休みに入って一週間が経った。それは陽菜が事故に遭って一週間と言う事にもなる。
身体のあちこちにある擦り傷の痕も、ほとんどお湯にしみなくなった。
陽菜は身体のシャンプーを流すと、湯船にざぶんっとイッキに肩まで浸かった。
バスルームの窓から、夏の夜風がゆるゆると吹き込んでくる。
天井からぽたりと湯気がアタマに落ちてきた。
「うわっ、冷たっ」
「陽菜、陽菜」
何日かぶりに聴こえる慶太の声に、陽菜は天井を見上げる。
「け、けいた」
――なんでお風呂の時に呼ぶわけ？
「慶太、何？　急用？」
「いや、急用とか、そんなの無いけど」
「いま、お風呂よ」
「そうなんだ。俺には時間の感覚がよくわかんないからさ」
「あんた、本当にこっちが見えないの？」
「なんで？　見えねぇよ」
「だ、だってさ……あたし服着てないし」
陽菜は無意識に膝を抱え込んで身体を丸める。
「少しは背、伸びたか？」
「失礼な、伸びたわよ。五センチもさ」
陽菜は折り曲げた脚を伸ばすと
「ウエストだってキュッとなったしさ」
「胸もデカクなったか？」慶太が笑う。

「む、胸は……でも、おっきくなったもん。前よりは」
「ふぅん」
「あっ、ウソだと思ってる」
「思ってねぇよ」
「だいたいなんであたしが裸の時に話しかけてくるわけ。いやらしい」
「そんなの知るか。声掛けられる時にかけてるだけさ」
「ホントにホントに見えないんでしょうね」
「見えたら見てみてぇよ……今のお前をさ」
陽菜は少しだけ、また身体を縮めた「う……ん」
膝を畳んだまま、濡れた茶色い髪を指でくるくると巻き取る。
「まぁ、困った事があったら呼べよ」
「助けてくれる？」
「無理だな」
「何でよ」
「だって、俺たち声しか通じないじゃん。何もしてやれないよ」
「そっか……」
言葉は途切れた。
夜風に虫の声が染み渡るように聴こえて来る。
「慶太？　慶太？」
小声で何度か呼んでみたが、慶太の声はもう聴こえなかった。

久しぶりの雨だった。
朝からどんよりした重い雲が頭上を覆いつくしていた。細い雨粒は何時まで経っても止む気配をみせない。
陽菜は久しぶりによそ行きの服に着替えて外へ出た。傘も差さずにバス停まで歩く。

小雨に打たれた巻き髪は、ワンピの上から羽織ったカーデガンの肩にしっとりと垂れ下がって揺れる。厚底のミュールサンダルは、静かにアスファルトを踏む。
何時もの癖でちょっとだけマスカラを塗ったが、唇は軽く色つきリップを塗っただけ。爪にも何も塗っていない。
何となく素のままで家を出た。
バスに乗り込み学校を通り越して舞浜のショッピングモールへ行くと、ぶらぶらと当ても無く歩く。
誰かを誘う気にはなれなかった。何となく、ひとりで何処かを歩きたい気分だった。

サーティー・ワンで買ったアイスを片手に、噴水近くのベンチに腰掛けると、陽菜は小さな溜息をついて腰掛けた。
――結局夏服を買っちゃった。
久しぶりに歩いて疲れた彼女は、ワッフルコーンの上に乗ったアイスにゆっくりと口を着ける。
「ヒナちゃん」
聞き慣れない呼び方と声に、陽菜は怪訝そうに振り返った。
「……」無言で相手を見上げる。
背が高い。髪は耳が半分露出するくらいの長さで、無造作に毛先は跳ねていた。
「……だれだっけ？」
「大塔時だけど」
男は曇り空を弾き飛ばすほど爽やかに笑うと
「ほら、この前バスでさ」
陽菜は男から視線を外して、空を見上げる。少しだけ雲に切れ間ができて、光の梯子が数本出来ていた。
――あ、天使の梯子。
「あの……さ」彼は少し困ったように陽菜に呼びかけた。

「あぁ、バスの」
彼女は再び彼を見上げると「それで？　なにか？」
「いや……たまたま見かけたから」
陽菜は手に持っていたアイスを思い出したように小さく舌ですくう。
「ふぅぅん」
大塔時（だいとうじ）　長道（おさみち）は少し間を置くと
「あの、返事は……どすかね」
「返事？」
「この前バスで手紙渡したと思うんだけど……」
陽菜は再びアイスを舐めて
「ああ、そう言えば」
すっかり忘れていた。その日の放課後、彼女はトラックに撥ねられたのだ。
大塔時は少し色白で細い身体にヒステリックグラマーのタイトなT　シャツが似合っていた。穏やかな風に揺れる前髪はウザったくないギリギリをキープしている。
高校に入ってからの陽菜ならば、とりあえずキープして何かと都合よくあしらっていただろう。
買い物につき合わせたり、ご飯をおごってもらったり、アミューズメントパークへ遊びに行くパートナーの一人にしたり。
なのに、今はそんな気になれない。
天使の梯子に照らされた雲の切れ間は、大昔の裸電球のようにクリーム色に発光しているようだ。
「うぅん……」
今一度、大塔時を見上げる。
「あたしの何処が？」
「えっ、何処って、全体というか……そのキレイな巻き髪とか」
大塔時は困ったように笑う。
陽菜は肩から落ちた毛先を、空いている手の指でくるくると絡め

る。
「大分傷んでるよ、この髪」
「とにかく、雰囲気っていうか、いろいろ」
陽菜は瞬きしながらフゥンと鼻で頷くと「とりあえず座れば」
彼女は自分の座っているベンチに視線を落とした。
「あ、うん」
細身のジーンズに包まれた長い足が、視界の隅でスッとクロスした。腰にズリ下げない履き方が、陽菜に多少の好感を持たせる。
ダラダラした服装のチャラ夫も、メンズコスメ使い放題のナルシストも本当はいけ好かないと思っている。
でもそんな事言ってたら、遊ぶ仲間が見つからない。
そんな中で、久しぶりに近づいたノーマルな男は、何となく安堵をもたらす。
「いつもあのバス？」
陽菜は手に持ったアイスを舌ですくい続ける。
「何時もはもっと早いかな。部活あるから」
「バスケ？　バレー？」彼女は彼の長い足をチラ見する。
「えっ？」
「運動部でしょ？」
「いや……吹奏楽部だけど」
「ふぅん」
陽菜は再び鼻で頷くと「もったいな」
何時の間にか海の在る方の空は雲が切れて、瑞々しい蒼い晴れ間が覗いていた。

第2章―【2】（後書き）

お読み頂き有難う御座います。
まだまだ続きますので、宜しくお願いいたします。

第2章―【3】

「事故に遭ったってほんと？」
和人がＺ８の革シートにもたれて言った。
「うん。ほんと」
陽菜はフルオープンの頭上から巻き込む風の匂いを嗅ぐように虚空を仰ぐ。
「連絡取れないから、焦った」
医大生の彼は何時も羽振りがよくて、ＢＭＷのオープンカーを足代わりにしている。陽菜は彼のＺ８で走る夕張浜の海岸線が好きだった。
「たいした怪我じゃなかったの？」
「まぁね」
陽菜は少し気だるそうに笑ってみせる「やっぱ普段の行いのおかげだね」
「行いね」
和人が笑って髪をかきあげる。
亀有の自宅から、陽菜が声をかければ何時でも来てくれる。彼にとって陽菜は本当の彼女ではないし、陽菜にとってもその方が都合がよかった。
ナルシス系の和人に、内心あまり興味はない。
スポーツカーをフルオープンにして、夕方の海岸線をドライブするのが好きなだけだ。
憂鬱な日々が、頬をすり抜ける風と一緒に何処かへ吹き飛んでゆく気がして、定期的に陽菜は彼と会う。
減速して路肩に車を停めると、和人はハンドルを片手で掴んだまま視線は真正面だった。
「今日は？　時間大丈夫？」

陽菜は満面の笑みを浮かべて見せる。
「夕飯は家で食べないと父親に殴られるから……」ウソだ。
「お茶は平気？」
「いいよ。何処か寄っても」
和人は余裕があるのかプライドなのかポーカーフェイスなのか、無理に迫ったりはしない。陽菜にも彼の思惑（こころ）は読み取れない。
ただ、無理に迫ってこられたら、1年も中途半端な関係は続かないだろう。
彼女は今まで付き合った誰にも、身体を許していない。
医大生や美大生、銀行員、区役所の人事部にいた男、陽菜は機会があればいろんな男と付き合う。
まるで慶太の亡霊を振り払うかのように、沢山の男に関わってきた。それでも今のところ、身体を許した男はいない。
「じゃ、高速使って都内にいこう。取って置きのカフェがある」
和人の唇が近づいて陽菜のリップに触れた。
1、2、3。陽菜は心の中で数を数えて顔を引く。3秒ルール。彼女は3秒だけならキスを許す事にしている。
自分だけのルールだ。
水平線に大きな夕陽が落ちかけている。海面がオレンジ色に焼けて、融けかけたような太陽は波に揺らいでいた。
和人は一瞬だけ残念そうに瞳を細めて笑った。陽菜はそれに気付かない振りをしながら
「みてみて、夕陽きれい」無邪気な振りをする。
彼はハザードを消して、勢いよくアクセルを踏む。
Z8のリヤタイヤがアスファルトを蹴飛ばすと、陽菜のゆるくカールされた茶色い髪を、汐風がさらってゆく。

＊　＊　＊

『一年半前』

白い綿毛が蒼穹を埋め尽くして、微かに照らす弱い陽射しにそれは煌いていた。

3月の雪は珍しい。校庭の乾いた土は、薄っすらと白い化粧を施して、淡々とした足跡が無数に残されていた。

周囲の喧騒が降り注ぐ雪に飲み込まれてゆく。

彼女は校舎の正面玄関のエントランスに一人で立っていた。校庭に残された無数の足跡に刻まれないひとりの足跡を探す。

在るはずの無い足跡。

「卒業おめでとう」

担任の市川公江は、由木陽菜に後ろから声をかける。

陽菜は振り返らずに頷いた。

「高校、頑張ってね」

市川の言葉に、陽菜は目を閉じた。

「何を頑張るんですか？」

一歩前に出ると、上空から舞い降りる綿毛が彼女の黒髪にふわふわと纏わり付いた。

「高校に行ったからって、何を頑張るんですか？」

市川は陽菜の淋しげな背中を見つめる。

「勉強とか遊びとかさ。部活だって中学とは違うし、高校に行くと視野がずっと広がるから」

教師の微笑みは、背中から陽菜を優しく包み込もうとしている。

彼女はそれを拒絶するように、再び一歩前に出た。

「部活なんてしないよ」

チャコールグレーのダッフルコートのフードが、黒髪と一緒に白く染まってゆく。陽菜はまた一歩足を踏み出すと、そのまま歩き出した。

「頑張ってね」
控えめの声が雪に吸収されて、やけに遠くに聴こえた。それはいかにも他人事で、自分には関係ない者への枕詞。
陽菜は無数に足跡の残った校庭を真っ直ぐに横切って歩いた。
卒業式に来ていた父兄も生徒も、正門からちりぢりに消えかけていた。
体育館の横に数人の生徒が足を止め、名残を惜しむように談話している。
その中にいた美智と杉原は校庭の真ん中を独り歩く、由木陽菜を見ていた。
白い綿毛に囲まれた人影は、ゆっくりと霞んでゆく。
美智と杉原もまた、校庭に在るはずの無い足跡をさり気なく探していた。

＊　＊　＊

家の庭を出ると、隣の庭木の梅の花が歩道を白くしていた。
前日に降った雨でアスファルトはまだ少し濡れ、少しだけ暖かい風に濁った花の匂いが鼻孔をくすぐる。
真新しい水色のブラウスにグレーのブレザーが春の陽を浴びて、こげ茶色の長い髪が風に揺れた。
入学式の日、通学バスで陽菜は美智の姿を見かける。自分と同じ制服を着る彼女を、陽菜はそっと見つめた。
同じ高校へ美智が入学した事を始めて知った。彼女と楽しく話したのは、中二の夏の河原が最後だ。
あの豪雨の後、彼女とはほとんど会話していない。三年になってクラスが別々になり進路が決まった時、彼女がどこへ行くかも気にしなかった。

でも同じ制服の美智を見た時、何故か少しだけホッとして、未開の地へ独り足を踏み入れる直前のような不安は何処かへ吹き飛んだ。それでもやっぱり声は掛けなかった。

美智は彼女のキレイな黒髪が失われた事を知った。

混雑した車内で、窓から入る陽射しは人混みの隙間をすり抜けて彼女の茶色の髪を艶やかに映し出していた。

人混みをすり抜けた光の中で、無数の塵がキラキラとゆっくり渦を巻いている。

美智は彼女が無事入学式に出て来た事に安堵を感じた。

あの日以来、どこか無気力に毎日を送る彼女に、美智は困惑してどう接していいのかも判らない日々を送っていた。

揺れるバスの振動で人混みが揺らめくと、陽菜の影は時折見えなくなった。

二人共声は掛けなかった。

春の陽射しが窓枠のステンレスに反射している。

混雑した通勤ラッシュのせいにして、二人はお互いを一定の距離の中で認識するだけだった。

第2章―【4】

『9年前』

静岡市は工業・商業ともに盛んで、オフィス街の外側にミカン畑が広がる。
旧商店街の呉服町通りが通学路だった。コンクリートと石畳の細い路地を抜けて、雑貨屋の横を抜けると並木の路地が伸びる。
細い路地を小中学から高校生まで、朝はひしめき合って歩く。
噴水の在る常盤公園の横を抜ければ、校舎が視界に入る
由木陽菜はその賑やかでどこかノスタルジックな通学路を1年間と少し通い続けて、転勤になった父親に従い千葉へ引っ越した。

「今日からこのクラスの仲間入りをした由木陽菜さんです」
担任の吉岡は、朗らかに彼女を紹介した。
富士山を隔てた関東方面は、ディズニーランド以外来た事がないまるで未知の世界だった。
テレビでよく観る新宿・渋谷を通り越して来た土地は、汐風の香る方角にビルが並び無駄に拾い道路と湾岸高速が一直線に伸びる何処かへんぴな場所だった。
初めての転校で環境が変わるというのは、子供にとって友達付き合いを造り上げるうえで非常に困難極まりない事だった。
考えが違う、話題性が違う……フィーリングが違う。関東弁の飛び交うクラスメイトが、同じ日本人に感じなかった。

桜の木が緑色に葉をいっぱいつけて強い春の強風に煽られていた。浜風が流れ込む幕張は、同じ海に近い静岡の風とはまったく違う。
高層ビルや高速道路を行きかう大量の車の匂いが、汐風に混濁し

ているのかもしれない。
校舎の四階からはマリンスタジアムの屋根が見えた。
マクドナルドの店員が、やたらオバチャンな事に奇妙な違和感を感じた。
小学校から新しい一軒家の自宅まで徒歩で十五分ちょっと。
登下校は何時も独りだった。
けれど、どこか違和感を醸し出すクラスの誰かといるよりは、独りで歩く登下校時間が僅かな安堵をもたらして好きだった。
何時ものように独りで正門を出て歩く。
小柄な陽菜は、同学年の集団に紛れると一瞬姿を消してしまうほど目立たない存在で、それを彼女自身意識するようにもなっていた。
駆け足で正門を抜け出す男の集団を目で追う。まだ新しさの残る大き目のランドセルが、カランカランと背中で音をたて揺れながら遠ざかってゆく。
陽菜は独りでも俯く事はあまりしなかった。
独りが嫌いでないせいかもしれない。
群れを成すことしか知らない連中を見て、少しだけ嫌悪も感じる。
考えてみれば静岡に住んでいた時も、仲の良い香代意外とはあまり一緒の行動はしなかった。
サーティーワンも独りで行ったし、路地裏の駄菓子屋だって独りで行った。
よくよく考えれば、以前とそう変わりない周囲の環境に気づく。
学校帰りに商店街はないけれど。
パタパタと足音が背中から聞こえる。それはたいてい自分の存在に無関係に近づいては通り越してゆくか、背中の路地に消えて行く。
しかし、その足音は彼女の背中の少し後ろで停まった。実際は停まったのではなくて、陽菜の靴音と同じリズムになったのだ。
後ろを誰かが歩いている。
陽菜はそれを感じながら、素知らぬ素振りで歩き続けた。振り返る理由なんてないから、彼女は最近ようやく見慣れてきた景色を真

っ直ぐに見つめて歩く。
枝の短い銀杏並木。洗車した事がないようなホコリ塗れの古い外車。何時も寝てばかりの大きな犬のいる古い洋館。
陽菜のランドセルに着いていたミニーマウスのキーホルダーが揺れる。
住宅街の路地を曲がった。
汐風が彼女の長い黒髪を揺らす。サラサラと艶の在る毛先が、ランダムに踊る。
「由木」
後ろから確かに声がした。自分の名を呼ぶ声だ。
名前を呼ぶ声が景色に飲み込まれないうちに思わず怪訝に振り返る。歩く足は止まらなかった。
ヒョロリと背の高い男子が独り、自分の後をつけるように歩いている。視線は自分を見ていた。
眼差しは暖かく、怪しげな雰囲気は微塵も無い。澄んだ瞳に魅入られて、陽菜は思わず足を止めた。
「由木の家も、こっちだろ？」
同じクラスにいる男の子だとわかったが、まだ言葉を交わした事は無いと思う。転校初日に全員に自己紹介されたけれど、クラスのほとんどは顔も名前もまだよく判らない。
「俺もこっちなんだ」
彼は白い歯を見せて笑う。
「ていうか、三軒しか離れてないって、知ってた？」
陽菜は立ち止まったまま、顔をぶんぶんと横に振る。
そんなこと全然知らないし、彼がどうしてそんな事を知っているのかさえ疑問に感じる。
近所に住んでいるのだから、そんな事知っていても不思議じゃないのに。
「由木、クラスであんまり喋んないよな」
男の子は立ち止まった陽菜の横に並ぶと、そのまま歩き出す。陽

菜も何故か後を追うように歩き出した。
「だって、あんま喋る事ないし」
「そんな事ないだろ」
「あるよ」
陽菜は彼の足元から伸びる影を見つめて歩く。
「なんか違う。やっぱ静岡の子たちとはなんか違う」
「別に変わんないよ。静岡も幕張もさ。おんなじ、おんなじ」
男の子は陽菜をチラリと振り返った。午後の陽射しに瞳の虹彩が優しく輝いていた。
陽菜が彼を見上げると、もう男の子は前を向いている。彼女は男の子の影を踏むように歩いた。
「でもさ、この辺、学校帰りに何もないね」
「何も無いって？」
「サーティーワンとかマックとかさ」
「へぇ、通学途中にそんな所に寄れたの？」
「たまにね。いつも通り道に在ったから」
男の子は急に陽菜の手をとった。
熱いくらいに暖かい手は、自分の手を完全に包み込む。男の子の手って、大きいんだ。と思った。
グイッと引っ張られるようにして、何時もは通り過ぎる路地を曲がった。
「えっ？」
「こっちこっち」
男の子は少し足早に彼女を引っ張る。陽菜は足が縺れてしまわないように慌てて左右の脚を運んだ。
古い垣根は葉がバラバラに伸びきっている。その横を曲がると、路地はさらに細くなった。ねずみ色のブロック塀が日陰で少し湿っている。その上を鼻にブチのある猫がゆっくりと歩いていた。
見たことのない景色の中を、彼女は男の子に手を引っ張られるまま歩いた。

「何処行くの？」
「いいから、いいから」
陽菜の心臓は高鳴っていた。何処に向かっているのか判らない不安と期待と、自分の手を包み込む熱のせいだ。
細い路地を抜けると、住宅街がそこで切り取ったように終わっていた。
国道が走る大通りに出る。
「こっち、まだ来た事無い？」
男の子の問い掛けに、陽菜は再びぶんぶんと首を横に振る。
直ぐ先にミスドが見えた。歩道沿いにのぼり旗がたなびいている。
男の子はミスタードナツの前で足を止めた。
「ミスドなら在るよ」
手を離される瞬間、まるで電流が途切れる気がした。今まで彼の動力を貰って動いていたみたいに。
陽菜は笑顔で頷いていた。何度も頷いた。
二人は１００円均一でセール中のドーナツを一つずつ買って、外に設置して在るウッドデッキ風のベンチに腰掛けて食べた。
ミニチュアダックスをつれた派手な女性が歩道を歩いてゆく。ドーナツの匂いに、ダックスは振り返って鼻をヒクヒクさせていた。
ここは少し時間がゆっくりと動いている気がする。高級外車が常に路上駐車されて観光客が行き交う大通りとはまるで景色が違った。
ちょっぴり汐の香りはする風で、のぼり旗がはためいている。心地よかった。
陽菜はドーナツを食べ終わる頃に小さな声で
「でさ……あんた、誰だっけ？」

第2章―【4】（後書き）

お読み頂き有難う御座います。
多忙の為、投稿が不定期になりがちですが、出来るだけ火曜日か水曜日には
ＵＰしたいと思います。
宜しくお願いいたします。

第2章―【5】

『小学三年生』

美智とは三年生のクラス替えで出合った。
線の細い今にも折れてしまいそうな手足が印象的だったが、体育の授業で徒競争が誰よりも速かった。
陽菜も体育は得意な方だったけれど、美智には敵わなかった。

「運動会のクラス対向リレーのメンバーを選びます」
その日、ホームルームの議題はもう直ぐ訪れる運動会の選抜メンバーだった。
普通の徒競走に順位着けは無かったが、クラス対抗のリレーだけはゴールした時に順位の着いたフラッグを手に持たされた。
「やっぱりアンカーは朋平さんだと思います」
クラスで最初に決まったのはアンカーを任せられる定位置だ。全員一致で美智が決まった。
陽菜はこんな時もあまり発言はしなかった。
クラスのみんなの流れに任せて、あまり自分の主張はしなかったけれど、朋平美智の脚の速さは認めていたから別段反対の意思もないし、在ったとしても誰かに告げる気もない。
「由木さんも速いと思います」
陽菜は思わず声のした方を見た。
美智が右手を上げていた。
「そう言えば、陽菜ちゃん意外と脚、速いね」
誰かが声を出すと、女子はみんな頷いて、何となく決まった。

面倒臭……正直それが本音だった。
対向リレーに選ばれると放課後に残ってバトンの受け渡しの練習などをしなければならない。
陽菜は何となく頬杖を着いて、黒板に書かれた自分の名前を見ていた。

三年と四年生の二年間だけ、陽菜は慶太とクラスが違った。クラスは違っていたけれど、よく一緒に帰った。
朝の登校時間は何となく違っていたけれど、帰りは時々一緒に帰った。
陽菜は相変わらず独りで帰るのが日常だったから、慶太は他の友達と一緒じゃない時には初めて一緒に帰ったあの日と同じように後ろから駆け寄って来た。
「リレーの選手に選ばれちゃったよ」
「へぇ、じゃぁ来週は一緒に居残りだな」
「慶太もリレー出るの？」
「ああ。俺アンカーだぜ」
陽菜はポカンと慶太を見上げた。
三年生になって陽菜は少し背が伸びたけれど、慶太も同じくらい背が伸びたらしくて身長差は相変わらずだ。
朝礼で背の順に並ぶと陽菜は前から5番目くらい、彼は何時も後ろから2、3番目にいた。
「なんか面倒だな」
「そんな事ないって。けっこう面白いじゃん」
「えぇ、お腹空いちゃうよ」
「由木は小さいくせに腹空かしだな」
パッと顔が紅潮して、グーで慶太の腕を叩いた。

放課後の居残り練習初日、校庭には他のクラスや上級生の姿もあった。それぞれにトラックを走ったり、バトンを渡す練習だけを何度もやっている。
「麻野くん、またリレー出るんだね」
バトンをケースから取り出した美智が、陽菜に声をかける。
「えっ？」
陽菜は少し驚いて振り返った。
今まで美智とはほとんど喋った事が無いし、一対一で話す事自体初めてなのだ。
「麻野くんと仲いいよね」
「いや、そんなんでも……」
「時々一緒に帰ってるじゃん」
美智は隣のクラスの連中と楽しそうにバトンを渡す練習を繰り返す麻野慶太を眼で追っていた。
陽菜はそんな美智を見て
「た、たまたま家が近所だからだよ」
「ふぅぅん」
美智は陽菜を見なかった。
自分を推薦した彼女に、ほんの少し敵意を感じて陽菜は困惑した。
「と、朋平さんは何時も誰と帰ってるの？」
「別に、誰とも」
彼女はポツリと言ってから、他のみんなに
「練習しよっか」
陽菜は何となく置いてきぼりを感じて、クラスメイトの輪に入る美智を見つめた。
午後の陽射しが長細い影の群れを揺らしていた。

第2章―【6】（前書き）

春のクラス替えで一緒になった朋平美智は、脚の速いやせっぽちの娘だった。
彼女によって運動会のリレーに推薦された陽菜は、美智の態度に少々困惑した。

第2章―【6】

放課後の春の陽射しは暖かくて、そのわりに風が吹き荒んで校庭の砂が少しだけ宙に舞ったりしていた。
帰り道はなんとなく慶太と一緒になって、西日が降り注ぐ紅の中をゆっくりと歩いた。
「脚いたっ」
陽菜はコトコトと背中でランドセルを鳴らす慶太を見る。
「俺は平気。全然平気だよ」
「毎日疲れた……」
陽菜は路地のブロック塀の陰に咲くタンポポを見つけて、何となく呟く。
慶太はそんな彼女をチラリと見て
「ミスドよってく？」
陽菜は顔を上げて直ぐに頷くと
「１００円かな？」
「いいよ、俺だすから」
「やった」
陽菜は少し元気な足取りになって、日陰のタンポポを見送った。

「ヤダなぁ、もう直ぐ運動会じゃん」
「土曜日は総練習でしょ」
「あたし、授業が無いだけでいいな」
ベランダで話していた三人組みの声が聴こえる。
陽菜も少し離れた所で何となく空を仰いでいた。
蒼い空に流れる雲が速い。
「昨日も麻野くんと帰ったの？」
背中から小さな声がして、陽菜はハッと振り返る。

「えっ？」
窓越しに朋平美智がいた。
「今週は毎日一緒に帰ってるね」
「だ、だから、帰り道が同じだから」
「昨日はミスドに寄ってたじゃん」
美智はまるで二人の後をつけていたように言う。
「な、なんで慶太にこだわるの……？」
「べ、べつに」
少し俯いた美智の顔が何となく紅潮して、彼女はそのまま振り返って教室の奥へ歩いて行った。

毎日の放課後の練習は陽菜にとって疲労の種だった。
一番脚の速い美智に、この時ばかりはみな従順で、陽菜に時折浴びせられる彼女の冷たい視線が居心地の悪さを感じさせた。
別に意地悪をするわけではなかったけれど、なとなくサバサバした乾いた態度が気になった。
普段教室では感じない居心地の悪さは、放課後の疲れを増幅させて風に吹かれるとよろめきそうになった。
金曜日の給食の時、担任が不意に言った。
「今日から給食は残さないで下さい。配られた分は、責任を持ってちゃんと食べましょ」
にこやかな笑顔の眼は、笑っていない。
ようするに好き嫌いは許さない。と言う事だった。
陽菜は特に嫌いなものが無かったから、あまりに気にも留めなかった。牛乳はあまり好きではないけれど、何とか毎日一パックは飲める。
配られた給食は特に風変わりなものではなかった。ナポリタンと野菜炒めと揚げパンと牛乳、それとプリン。
陽菜は何となく美智を見た。
そう言えばよく給食を残している彼女が、ふと気になった。

好き嫌いが多いのか、もともと少食なのか、だからあんなに身体が細いんだな。と、以前思ったことがあったから。
美智の箸はあまり進んでいなかった。
「今日は、全部食べるまで各々片付けないでね。ちゃんと食べてから片付けてください。当番はそれまで待つ事」
明るい声だったが、言い方は何となく冷たく厳しいものだった。
給食係の連中がざわついた。
陽菜は普通に何時も通り食べて食器を片付けていた。
再び美智を見る。
野菜炒めがほとんど残っていた。
俯いた顔は、なんだか青ざめている。
どうしてだろう……彼女の少し孤高なところが陽菜は気になっていた。
運動会の練習の時にはあんなにリーダーシップを発揮しているのに、普段は風すらも気付かずに通り過ぎてしまいそうなほど存在感が無い。
自分と少しだけ似た匂いがする。
今はあまり意識していないけれど、転校して来たばかりの頃はまったく同じだった。
給食を残して食べきれない娘は他にも数人いて、それぞれ困惑して俯いていた。
担任教師は自分の昼食を終えると
「それじゃ当番のひとよろしくね。給食センターにはいってあるから」
とだけ言っていなくなった。
陽菜はゆっくりと美智の机に近づいて、何処かへ遊びに出かけたらしい前の席を引いた。
椅子に後ろ向きに腰掛けると
「野菜、ダメなの？」
美智は黙ったまま小さく頷いた。

「でも、食べないと片付けられないよ」
美智は少しの間黙っていたが、不意に思い出したように
「麻野くんは、幼稚園の時からあたしが一番仲良かったのに……」
「えっ？」
陽菜はとっさで今は無関係な話題に全部が聞き取れなくて、思わず聞き返した。
「あんたが転校してくるまで、あたしが一番仲良かった。クラスが違っても、一番だった」
「そ、そんな、あたしは別に一番じゃないよ」
「麻野くんはきっと一番だよ」
そんな事を意識した事がなかった陽菜は、思わぬ美智の発言に壁易した。
彼にとって自分が一番だなんて考えた事も無かったし、もちろん自分からの感情も考えた事が無い。
誰かを好きだと意識した事もあまり無い。
話しやすいとか、居心地がいいとか……そんな感覚は意識するけれど、それから好き嫌いを識別することはなかった。
でもきっとこの娘は麻野慶太の事が好きなのだと認識した。
自分と同じ年で同じクラスで同じ学校で暮らす目の前の彼女が、人を好きだと感じて、そして自分に対抗意識を抱いている事がショックだった。
陽菜は美智の机に乗った給食のおぼんに手を伸ばすと、野菜炒めのニンジンとピーマンを手掴みで口に運ぶ。
美智は突然の陽菜の行動を、呆気に取られて見つめた。
「どうせ食べられないのはピーマンとニンジンでしょ？　キャベツくらいはあんたが食べな」
美智は思わずキャベツを箸で摘むと、目を瞑って口へ運んだ。
校庭からは昼休みの喧騒が窓から吹く風に乗って聴こえてくる。
開け放った窓のカーテンがパタパタと鳴っていた。
皿の中の野菜炒めを二人で食べた。

半分以上は陽菜の口へ運ばれたけれど。

第3章―【1】（前書き）

さり気なく、第三章にはいります。
過去の話から現代に戻る途中でしょうか。

第3章―【1】

自転車の車輪が風を切ってしゃらしゃらと音を鳴らして廻りながら、夏の雨上がりの陽光を浴びてキラキラと光る。
中学生になった陽菜と慶太は相変わらず仲がよかった。
共通するのは家が近いというだけ。それだけだと学年が上がって思春期を迎える頃には離れ離れになる事が多い。
他にも仲良しの友人が出来たり、それなりに好きな人が出来たり。
でも陽菜はちょっと意地悪だけれど気さくで優しい慶太を、慶太はちょっと意地っ張りだけれど素直で意外と子供っぽい陽菜を一番親しいパートナーとして変わりなく日々を送っている。
アスファルトの水溜りを車輪が横切ると、小さな飛沫が跳ね上がった。
「きゃっ。ちょっと、水溜り避けてよ」
陽菜は自転車の後ろに立ち乗りしたまま、水滴のついた自分のローファーをちら見して慶太の頭を小突いた。
長い黒髪が風に引かれる。
「バカ、そんな面倒くせぇ事できっかよ」
慶太は前を向いたまま自転車のペダルをひたすら踏む。
キキッと目の前に別の自転車が路地から出てきて慶太が急ブレーキをかけると、陽菜は前につんのめって彼の後頭部に胸が当たった。
「ぎゃっ」
思わず慶太の頭を叩く。
「いってえなぁ」
「危ないじゃん」
「北斗に言えよ」
目の前に出て来たのは杉原北斗。
中学は隣の小学校と二つが一校に集う。杉原は隣の小学校から来

て知り合った。
ちょっとカッコつけのところがあるけれど、慶太とは何かと気が合うようで、入学当初それぞれに他校から来た連中を敬遠し合う中、早々に親しくなってしまった。
「またお前ら一緒かよ。てか、由木は朋平と一緒に来るんじゃなかったの？」
杉原はマウンテンバイクについているベルをチンッと鳴らした。
「美智は弟のお昼作ってから来るから遅れるってさ」
陽菜が慶太の後ろで言う。
「へぇ、由木も弟いなかったっけ？」
「大知はたくましいからほったらかしでＯｋなの」
陽菜は杉原に拳を突き出して
「出発っ」
慶太の肩をぽんぽんと二回叩いた。
「なんか、お前由木の馬みてぇ」
杉原が慶太の自転車に並走する。
「うるせぇよ」
慶太が抜きに出た。
陽菜が振り返って杉原に「駅前のマックで待とう」
「映画、間に合うのか？」
「次の回にすればいいじゃん」
しゃっと水溜りを踏んで飛沫が光を浴びると、一瞬小さな虹が浮かんで消える。
「ちょっと、水溜りぃ」
陽菜の手が、再び慶太の頭を小突いた。

普段の平日マックの店員はおばさんが多いけれど、夏休みに入った途端に若々しい笑顔が注文カウンターを埋め尽くしていた。
三人はテーブルに着いて、杉原は腰掛ける前にポテトを口へ運ん

でいる。
「知ってる？　二年は林間学校だってさ」
「ああ、恒例だろ。来年は俺らも行くんだ」
「なんか面倒くせぇな」
「夏休み取られる気分だよ」
杉原と慶太が話す。
「そうかな、ちょっと楽しそうじゃん」
陽菜が幕張の空に浮かぶ白い雲を眺める。大きな窓からは高層ビルが見えていた。
「美智は明日から部活あるってさ」
高層ビルの窓に反射している陽射しが眩しくて、陽菜は眼を細める。
慶太はテーブルに肘をついて
「俺なんて今日からだぜ。午前中一汗かいてきた」
「あっ、だから朝いなかったのか」
「由木はのんびりしていいよな」
杉原がバニラシェイクのストローから口を話す。
「なによ、杉原だって帰宅部のくせに」
「ばっか。写真部だって夏合宿あるんだよ」
「うそっ、マジで？」
「文化祭の展示用写真を夏の間に撮らなくちゃいけないんだ」
「へぇ」
陽菜と慶太が同時に頷いて、ハンバーガーを頬張った。
コンコンと窓ガラスが鳴って三人が振り返ると、美智が窓の外で手を振りながら笑っていた。

第3章―【1】（後書き）

お読み頂き有難う御座います。
折り返しを過ぎた感じです。
少しでも暇つぶしの一環にでもなれば幸いですが（^^；
宜しくお願いいたします。

第3章―【2】

「滝口先輩は、お祭り行かないんですか？」
美智は、水道の水で顔を洗っている二年生に声をかけた。
「ああ、俺混み合ってる場所が苦手でさ」
小柄だけれども気さくで後輩の面倒見もいい滝口剛（たきぐちごう）は、女子陸上部からの評判も上々だった。
美智は小学校の頃からずば抜けて脚が速かった。
細い身体はしなる様に地面を蹴って跳ねる様に走る。その姿は誰の目にも綺麗だった。
中学に入って本格的に陸上の短距離走を始めた美智に、いろいろ教えてくれたのも女子の先輩より滝口だった。
もちろん同性の先輩のアドバイスより、ちょっと気になり始めた異性である彼の声がより耳に入り込んだのも確かなのだろうけれど。
「えぇ、じゃあ先輩お祭り行った事ないんですか？」
「いや、小さい時に親と一緒には行ったよ。人に酔って具合悪くなったけどさ」
滝口はスポーツタオルで顔を拭き、それを首に巻きながら言った。
彼はスパイクの入ったケースを掴むと
「朋平は行くの？」
「え、ええ。判んないけど、どでしょ。一緒に行く人がいれば……」
美智は日焼した顔でえへへと笑い、脱いだスパイクの土をほろってシューズケースに仕舞い込む。
「なんだ、一緒に行くやつイネェのかよ」
滝口は首に巻いたタオルの両端を手で掴んで笑うと、後ろから声をかけられた同級生に振り返る。
美智はタイミング的に話しを切り上げなくてはいけなくて、高跳びのマットを仕舞い始めた一年生の仲間の方へ走った。

「いいなぁ、美智は滝口先輩と仲良くてさ」
高飛びをやっている一年生の佳奈が、教室で声をかけてきた。
一年生は更衣室を使えないため、みんな教室で着替える。夏休みは運動部の部活が時間単位で区切られているので、校舎の中は何時もがらんどうだ。
今日は最後の時間だった陸上部の練習が終わる頃、西日が差し込む教室にはヒグラシの声が注ぎ込む。
「べ、別に仲いいってわけじゃ。いろいろ教えてもらってるだけ」
「そうかな。先輩もまんざらでもないんじゃないの」
佳奈はそう言ってバックを手に取ると
「もう帰る？」
「うん。帰るよ」
「じゃぁ、一緒にいこ」
二人は教室を出ると、昇降口まで歩いた。
一階の昇降口まで来ると、佳奈のクラスの担任教師が偶然職員室から出てきて
「あ、ちょっと佐々木、ちょうどよかった。ちょっと」
「あぁ、掴まった」
佳奈は苦笑して
「あたし、期末ダメダメでさ。補修出てなかったから」
彼女はそう言って、「じゃぁ」と小さく美智に手を振ると、呼ばれた職員室へ向う。
美智は小さく息を着いて、一人で昇降口を出た。
陽菜にでもメールしようかと思ってケイタイ電話を取り出して校門を出ようとした時、滝口の姿に気付いて立ち止まる。
「今、帰り？」
「え、ええ……」
滝口は独りで、何となく美智の横に並ぶと二人でゆっくりと歩き出した。

グラウンドでいる時とは違っていた。
自分よりも少しだけ背の高い彼の向こうから西陽が降り注いで、滝口の顔がよく見えなかった。
少し伸びたスポーツ刈りの毛先が逆行に黒く浮かんでいる。
美智の細い身体の奥で、バクバクと鼓動が高鳴る。小さな胸が肋骨に押し出される気がした。
蝉の声が住宅街の何処かから降り注ぐ。
「お祭り行くの？」
毎年、総合運動場で盆踊りを含んだお祭りがある。国道から駅まで屋台が並び、運動場も色とりどりの提燈で飾られる。
町では一番おきな盆踊り祭りだから、お祭りと言えばそれの事だ。
「どうしようかな。去年は陽菜と行ったけど」
「陽菜って、何時も一緒にいる友達？」
「ええ」
美智はカバンを持ち替えながら滝口を見ると、直ぐに前を見た。
口から心臓が飛び出そうになりながら、口を小さく開いて
「先輩、行きます？」
「えっ？」
咄嗟に言ってしまった美智の言葉を、滝口は聞き返す。
美智は鼓動が高鳴りすぎて、嗚咽が出そうだった。唾を飲み込んで息を着くと小さな声で
「今日、一緒に行きませんか？」
肋骨が軋むほどに、鼓動が高鳴っていた。

＊　＊　＊

美智が家に着く頃、ケイタイの着メロが鳴った。液晶には陽菜の名前が浮かぶ。

「あ、美智、部活終わった？　今日、お祭り行くでしょ？」
「あぁ……うん……今日はちょっと」
「どうかしたの？」
「うん……ちょっと、体調悪くてさ」
「えっ？　大丈夫？」
「う……ん。たいした事無いんだけどさ、ちょっと眩暈もするし、なんか頭も痛いし……に、日射病かな……あ、熱射病かも」
「そ、そう」
陽菜が声のトーンを落とすと
「じゃ、明日行こうか。今日は休んだ方がいいよね」
「うん……ゴメン」
美智が沈んだ声で言った。
「そんな、大丈夫だよ。ゆっくり休みなよ」
美智は静かに携帯電話を折りたたむと、玄関のドアをゆっくりと開けた。

第3章―【2】（後書き）

今年の夏は暑いですね。
皆さんも、夏バテしなように気をつけましょうね。

第3章―【3】

夜の陽だまりが何時もは暗い通りを明るく照らし出していた。喧騒と言うにはあまりに高揚に溢れる賑わいが、街の灯とは違うぼんやりした期限付きの明かりに彩られている。

「なんでお祭りなんだよ」

慶太はコンビ二の駐車場の外れに自転車を止めて言った。

「いいじゃん、おまつり」

陽菜は慶太の横で、彼が自転車にワイヤーロックするのを見ながら

「どうせ暇なくせに」

「練習で疲れてんだよ」

「午後から杉原とプール行ったからでしょ。練習午前中じゃん」

陽菜は笑って言い返すと、先に歩き出す。

小走りに彼女に並んだ慶太は

「けっこう人いるんだな」

「あたりまえじゃん。お祭りなんだから」

二人は人混みの中を縫う様に、時折腕と腕が遠慮気味に触れ合ったりしながら歩いた。国道の歩道にも屋台が並んで、小さな子供が綿菓子を親にねだったりしている。

運動公園に近づくにつれ、盆踊りの音楽が大きくなってゆく。

「あたしも浴衣着てくればよかったかな」

陽菜は通り過ぎる自分と同い年くらいの浴衣姿を目で追った。

ふと横に慶太がいない。

あれ？　と思い周囲を見渡すと、彼は屋台でたこ焼きを買っている。

「ちょっと、もう」

「あ、なんか腹減ったじゃん」

慶太はそう言って、たこ焼きをひとつつまみながら、陽菜にも差し出す。

「まぁ、いいけど」
仕方ないように、陽菜もたこ焼きをひとつ口へ運んだ。
「あち」

ぼんやりと闇を照らし出す無数の提燈が、緩やかな浜風に揺られていた。
盆踊りの音は人波の喧騒に呑み込まれる事もなく、運動場の周辺に植えられた植え込みに染み渡る。
「凄い人だね……」
「先輩、もうギブですか？」
二人は運動場のやぐらを取り巻く屋台の間を縫って人混みを避けると、草木の茂る場所を歩いていた。
「ちょっと疲れたな」
滝口の声に、美智はふふっと、陽菜には見せない笑いを造る。
浴衣の袖を振って、口に手を当てた。
「先輩、お腹空きませんか？」
「ちょっと空いた」
彼は屋台の明かりの方を見て
「あ、俺なんか買って来ようか？」
「いいですよ、無理しなくても。あたしが買ってきます」
美智はそう言って下駄を鳴らしながら、屋台の明かりに向う。
緊張しっぱなしで、少し独りで歩きたかった。
カランコロン、カランコロンと下駄の音が鳴るたびに、少しずつ緊張が解けてゆく気がした。

「先輩焼きそばって食べます？」
美智は透明なパックを差し出しながら
「たこ焼きも買っちゃいました」

二人はベンチを探して腰掛ける。ふと見ると意外とベンチはカップルで埋まっていて、空席を探すのに少し歩く必要があった。そのついでに、二人で屋台の方へ行き、飲み物を買った。
「朋平がいつも一緒にいる娘って、たしか……」
「陽菜ですか？」
「あ、そうそう、陽菜、由木陽菜だっけ」
「知ってるんですか？」
「あ、ああ。二年の間ではかなりね」
滝口の質問に美智は快く応えた。
彼は自分に興味がある。その延長として、自分の交友関係も知りたがっていると思ったから。
「一年の間でも、みんな知ってますよ」
彼女は浴衣の袖を揺らしながら、ペットボトル入りのサイダーを飲む。
「そうなの？」
「そうですよ。陽菜ってあまり社交的じゃないくせにモテるんです」
「内向的な娘なの？」
「どうでしょう……そこまでじゃないけど、浅く広い付き合いは苦手みたい」
「そう……」
滝口はコーラを飲む手を止めると
「一年の麻野ってさ……サッカー部の」
「ああ、慶太ですね。麻野慶太」
「由木陽菜って、麻野と付き合ってるの？」
美智は再びふふっと笑ってみせる。
「どうしてですか？」
「いや……仲がイイって噂だし、あいつらもよく二人でいるの見かけるし」
「別に付き合ってはいない……って二人は言うかな」
美智は三矢サイダーをコクンと飲んで笑いをやめた。

盆踊りの音楽が風に鳴り響いて、ゆらゆらと提燈を揺らしているようだった。
人混みの中を、少しぎこちない足取りで歩いた時間が、既に遠い昔のようにも感じる。
笑顔がフッと消えた。今までの笑顔が海の高波だとすると、まるで押し寄せていた波が急激に引くように、スッと真顔になる。
植え込みのねむの木が夜風に揺れている。
運動場の外側に吊るされた提燈の明かりは、何処までも続いて闇に消えていた。
「先輩って、もしかして陽菜が好きなんですか？」
彼女は必死に笑顔を作ろうとした。
「いや……どういう娘なのかと思って」
滝口は困ったように笑って見せた。何時もと違う、とてつもなく頼りない笑顔だった。
「今日は、本当は陽菜の事が聞きたかったんですね」
美智はベンチからピョンと立ち上がると
「でもダメですよ。陽菜と慶太の間には、誰も入れないから」
そう言ってゆっくり歩き出すと
「今日は有難う御座いました。楽しかったです」
震えそうな肩をぎゅっと押さえ込むように駆け出した。
浴衣の裾は狭くて、何時ものように歩幅を取れなくて、なかなか前に進まなかった。
提燈の明かりが照らし出す夜の喧騒の中、カランコロン、カランコロンと足早に鳴る下駄の音色が、やけに哀しく響いた。

第3章―【4】

中1の冬は暖冬だった。それなのに三月初旬になってから急な大雪が降った。

大分暖かくなった頃に、急な肌寒さ。雪でも降るんじゃないの？と冗談まじりに話していたやさきの天候だった。

湿り気を帯びた大粒の雪がボタボタと容赦なく降り注いで、運動部のグラウンド組みはみんな、練習が休みになった。

一斉に帰り支度をする昇降口が異様な込み具合で、陽菜と美智は下駄箱周辺が空くのを廊下に佇んで待った。

「なんでこんな人多いの？」

陽菜が壁際に寄りかかってぼやく。

「運動部が休みだからだよ。あたしだって、普段はここにいないじゃん」

美智が笑った。

「そう言うことか」

辺りを見渡す陽菜に美智は

「慶太は帰らないのかな？」

「しらない。杉原の部室に遊びに行ったよ」

「じゃぁ、あたしたちも行ってみる？」

「いいよ。なんか面倒じゃん。他の人たち知らないし」

陽菜は首に巻いたマフラーを一度といて、再び結びなおす。

「あっ、じゃぁあたし行ってこようかな。秋の新人戦の時にとってもらった写真、大っきくしてもらう約束だし」

美智は床に置いていたバックに手をのばして

「ヒナもサッカー部の写真とかもらえば？」

「いらな～い」

陽菜はわざとしらけた声で言ってから、ケラケラと笑う。

美智は少し足早に、写真部の小さな部室がある四階に向かって歩

き出すと
「じゃぁね、ヒナ」
振り返って何度か手を振った。
昇降口の人混みは大分減っていた。
ドアが開くたびに外の冷えた空気が入り込んで、下駄箱をすり抜けた風が陽菜の頬に触れる。
彼女は一つ息をついて、自分のカバンを手に取った。
リノリウムの床にぼんやりと蛍光灯の明かりが映りこんで、人混みの去った静けさは、まるで氷の上にでもいるみたいだった。
「よう、今帰るとこ？」
聞き慣れた声に振り返ると、階段の踊り場に慶太の姿があった。
「うん」
彼女は小さく頷いて「美智に合わなかった？」
「ああ、俺が出てくる時に部室に入ってきて、なんか盛り上がってたぞ」
慶太はカバンを肩に担いで
「なに？　あいつ来年ジュニアインターハイだって？」
「ああ、狙ってるみたい」
慶太と下駄箱に向う。
下駄箱を挟んだ向こう側から誰かの話し声が聞こえるだけで、人影はほとんどいなくなった。
外は冷たいボタ雪が相変わらず降りしきっている。
積もり損ねたような雪が、溶けかけのカキ氷のように地面を埋め尽くしていた。
陽菜は持っていた傘を開いて
「慶太、傘は？」
「持って来るわけないじゃん」
「だよね」
陽菜が呆れ顔で笑うと、慶太に傘を渡した。

彼女が持つと、慶太の背丈をカバーするのに腕を上に伸ばして傘をささないといけないから、異常に疲れるのだ。
慶太は彼女の傘を持って少し右に多くかざす。
「なんでお前、紅い傘なの？　目立ちすぎだって」
「いいじゃん。可愛いじゃん」
「別に可愛くなくていいんだけど」
溶けかけのカキ氷を踏みしめる二人の足跡が、ずっと続いていた。

住宅街を抜けて国道の横断歩道の前で二人は信号待ちをしていた。
車が往来する度に、シャーベット状の雪が大きく跳ね上がって、時折それを被った歩行者の悲鳴が聞こえる。
「少し下がった方がいいね」
陽菜が少し後ずさりをして、慶太もそれに合わせて下がる。
ちょうどその時に大型トラックが走って来た。
「やべ」
ザザッとシャーベットの飛沫が上がった。
信号待ちをしていた他の学生が悲鳴を上げた。
みんな車道から少し下がっていたが、飛沫が大きくて被ってしまったのだ。
陽菜は濡れなかった。
慶太が彼女を押して、飛沫と陽菜の間に入ったから。
「ビックリした」
彼の肩が彼女の頬にピタリとくっついて、頬っぺたがグイッと歪む。制服の生地の匂いがした。
自分の制服と同じ生地なのに、自分のモノとは何となく違う匂いがするのはきっと、彼の匂いが服に混じっているせいだろう。
「ムカツク、びしょ濡れだよ」
周囲の学生が声を荒げていた。
「あ、ありがとう……」頬っぺたを歪めたまま陽菜が言った。

「でも、ほっぺた痛いかも」
慶太はフッと、彼女を突き放して傘を傾けると
「てか俺、背中ずぶ濡れ」

家に着く頃には雪はだいぶ小降りになった。
相変わらずアスファルトの上は、溶けかけのシャーベットで埋め尽くされていた。
重く圧し掛かる空は光を遮って、見慣れない景色は時間の感覚が失われる。
三月の寒空の下を歩く時間が、二人には妙に長く感じられて、何時もよりずっと一緒にいるような気がした。
低い空が胸の内部に圧力をかけているように、少し息苦しい。
だから陽菜は思わず声をかけた。名残惜しい気持ちは、何故か初めてだった。
「お茶でも飲んでいく？」
陽菜は自宅の門の前で慶太に言った。
「背中もズボンもびしょ濡れだしなぁ」
「じゃぁさ、着替えたら来なよ。かばってもらったお礼」
彼女は笑って、慶太の差し出した傘を受け取ると
「どうせ、後はひまなんでしょ？」
「ああ、じゃぁ着替えてくるよ」
慶太は三軒先の自宅へ向かう為に歩き出すと
「俺、腹へったから食いもんもな」
陽菜は笑って手を振ると、下ろした手で傘をたたんだ。
冷たい雪が鼻の頭に落ちると、アッという間に水滴になって流れ落ちた。
「つめた……」

第3章―【4】（後書き）

お読み頂き有難う御座います。
少し遅れがちですが、執筆は順調ですので今後とも宜しくお願いいたします。

第４章―【１】（前書き）

最終章に入りました。
暇つぶしになっていただければ幸いです。

第4章―【1】

陽光が乱反射するような青空と上空に競りあがった積乱雲が、真夏の到来を告げていた。
陽菜は半袖のパジャマを脱いで着替えると、ちょっとだけ眉を描いてから部屋の窓を開けた。
ベランダに出ると、隣の蒼い屋根越しにその向こうの家が見える。
隣の家のカーポートの柱に見え隠れしながら、三軒となりでは慶太の父親と母親が黒色の服装で車に乗り込むのが見えた。
手で顔を仰ぎながら、母親はせかせかと助手席に乗り込む。
彼女はベランダから部屋に後ずさりして、家の前を通り過ぎるカローラフィルダーを見送った。
凪いだ風が、彼女のこげ茶色の髪を揺らす。
「なぁ、何か見えるのか？」
慶太の声がした。
陽菜はベッドにドッと腰を下ろす。昨夜近所の美容室に駆け込みで行き、カラーリングし直した茶色の髪に手を触れる。
「さぁね」
わざと素知らぬ返事をする。
「なんかさ、俺も行かなくちゃいけないような気がするんだよ」
慶太はやっぱりここにいるのだろうか？　実体が無いのに、何処にいるとかという所在感覚があるのだろうか？
「行くって何処に？」
「何処って言うのは解んないけどさ」
ストパーで消えたサイドの巻き髪に手を触れると、陽菜は何時もの癖で指をクルクルと絡める。
「慶太ってさ、ここにいるの？」
「ここって？」

「ここは、あたしの部屋」
「ああ、そうか。そうなのかな？　でもヒナの存在を近くに感じるだけで、見えてるわけじゃないから何処にいるのかは正直解んないよ」
陽菜は部屋の中をぐるりと見渡す。
大分黒に近づいた髪色と巻き髪を取り除いただけで、なんだか慶太と面と向かえる気がした。
「あたしも出かけようかな」
「何処に？」
慶太はまだ話しかけてくる。
最近は会話をする時間が最初の頃よりも長くなった気がする。
もちろん、急にその声は消えてしまう事も多いけれど。
陽菜はテーブルの上に置いてあったピアスに指で触れると、手に取らず
「ないしょ」と言って部屋を出た。
玄関を出ると陽射しが暑かった。黒いミニスカートから露出した生脚があっと言う間に熱を帯びる気がした。
「暑っ」
彼女は思わず口に出して歩き出す。
慶太は声を掛けて来ない。もう眠ってしまったのだろうか。
近くのバス停から普段は乗らない路線バスに乗り込むと、次第に記憶から遠ざかる景色を陽菜はボーっと眺めていた。
国道から県道に入って小高い丘を登り、下る前のバス停で降りる。
登っているバスの窓から、下ってくる一台の車が見えた。
慶太の父親と母親の乗った白のカローラフィルダーは、バスの中の陽菜には気づく事もなく静かにすれ違う。
陽菜は振り返り、車の後姿を少しだけ見送った。
上りきった所でバスを降りると、周囲の林から蝉の鳴き声が溢れだしていた。

風が吹いている。緑の匂いを含んだ風は、少しだけ心地いい。
陽菜のストレートに伸びた髪の毛は、ゆるい風を受けてサラサラと揺れた。
バス停のすぐ横には大きなお寺が在って、その脇の小道をさらに登ると墓地が広がっている。
丘の斜面を利用して段々に積み重なった墓石の集団。
杉林が周囲を囲んで、時折カラスが鳴いている。
「ここは？」
慶太の声がした。
陽菜は三年ぶりの場所を無言で歩いた。風に乗って香の匂いが漂って、彼女はそれに導かれるように足を運んだ。
麻野家の墓石の前で脚を停める。
慶太の両親が備えっていった花とお供え物が、燃え尽きそうな線香の煙に霞んでいた。
「慶太、見えるの？」
「いや、風の匂いを感じる。あと、土の匂い……普段は感じない土の匂いだ。それに、線香……」
「そう……」
陽菜は麻野家の墓石の前で両手を合わせると
「慶太……ここが慶太のお墓だよ」
彼女は手を併せて目を瞑ったまま続ける。
「ずっと来れなかった……怖くて、淋しくて……ここに来たらもっと淋しくなると思ったから、ずっと来れなかったの」
「俺の墓があるんだ」
慶太は他人事（ひとごと）のように言う。
「そうだよ、だって慶太死んじゃったじゃん。あたしだけ残して死んじゃったじゃん」
陽菜は併せた手を解いても瞼を開こうとはしなかった。
蝉の鳴き声がじわじわと夏の大氣に入り乱れ、周囲の墓石に吸い込まれた。

「ありがとう。ってずっと言いたくて、でも言えなかった。言えないまま、慶太いなくなっちゃうし。あたしなんかの為に死んじゃうんだもん」
陽菜の固く瞑った睫毛の隙間から、雫が染み出す。それは夏の風に負けない熱さをおびていた。
三年間我慢し続けた涙の雫は、自分でも驚くほどに熱く頬に沁みる。
「そんな事いうなよ。俺、陽菜が助かってほっとした。きっと、ホッとしたら、なんか気が抜けたんだな」
「気ぃ抜くなっ」
陽菜は小さく鼻声で叫んだ。
カラスの鳴き声が聴こえて、バッサバッサと羽音がした。

携帯電話が鳴った。
香の煙が風に流れて、晏天(そら)に消えて行く。
『もしもし……ヒナ？　今日、杉原たちとお墓行くけど……たまには一緒に行かない？』
美智の声だった。
陽菜は瞳を閉じて、息を殺すように
『うん……あたしはいい。また、今度ね』
『そう……』
淋しそうな美智の声が、受話器の向こうで消え入りそうに応える。
陽菜は俯いて少しだけ、独り笑みを浮かべ
『美智？　ありがと』
頭の旋毛にジリジリと陽射しが照りつけて、午前中の時間が大分少なくなった事を告げていた。
陽菜は携帯電話を閉じると、もう一度墓石に手を併せて踵を返し

た。

第４章―【２】（前書き）

今回の作品はフラッシュバック方式を多様している為、時系列が混乱するかもしれません。
あえて「何時」という見出しはあまりつけていないのですが、全編通して眺めていただければ解るようにはしてあります（＾＾；
すこし疲れる構成かもしれません…。

第4章―【2】

「あら、ヒナちゃん久しぶり」
声をかけられて彼女は振り返った。
懐かしい笑顔がそこにはあった。近所に住んでいるその人を懐かしいと思うのは、もう何年も会話を交わしていないからだった。
時々見かけても、陽菜の方から遠ざかった。その人と会話を交わすと涙が零れそうで怖かったから。
その行為は感情を殺して誰かと接する現在の陽菜を象徴している。
それでも向こうから声を掛けられれば、昔の由木陽菜がぶり返したかのように、そこから退く事は出来なかった。
「こ、こんにちは……」
静かに声を返す。
「最近見かけないから淋しかったのよ」
彼女は自分の息子がいなくなった事と、自分に逢えない事を混同して寂しさという感情で統合しようとしている。
陽菜はそう思った。
「あはは……そんな……」
引き攣っていたけれど、何とか笑顔を返す。
「ずいぶん綺麗になって、まぁ」
綺麗なのだろうか？
今の自分が綺麗に見えるのだろうか。
陽菜は柔らかく揺れるサイドの巻き髪に、何時もの癖で指を絡ませる。
「そんな事……あたしなんんて」
「どんどん可愛くなるのね。女の子は」
こころの奥で、ピキッと何か鳴った気がした。まるで肋骨の内側にヒビでも入ったのかと思った。
心臓と肺の隙間が痛んだ。

一児の母親は、亡くなった息子に何を思い日々を過ごすのだろうか。
成長、変化を遂げる事の無い遺影と毎日顔を逢わせては、何を思うのだろうか。
――おばさん、あたし慶太と話したよ。最近何時も話してるよ。
声を出しそうになった。
昔のように、自分の母親と変わらぬタメグチで会話をしてしまいそうになる。
慶太はどうだったか知らないけれど、あの頃陽菜は母親が二人いるような気がしていた。
自分の息子と同じように世話を焼いてくれる彼女を、もうひとりのお母さんのように感じていた。
飛び出しそうな馴れ合いの言葉を急いで呑み込むと、もう片方の肺が痛んだ。
無言で笑顔を崩さなかった。
「黒もいいけど、茶色い髪もステキね。ヒナちゃんにとても似合うわ」
彼女は優しい笑みで語り掛ける。
午後の陽射しが眩しくて、陽菜は少し目を細めて彼の母親を見つめた。
「辛いかも知れないけれど、たまには逢いに来てあげてね。慶太は意外と淋しがりやだから」
嗚咽が込み揚げて慌ててそれも飲み込んだ。
彼女は知っているのだ。自分の気持ちを誰も解ってくれないと思っていた。
去年の三回忌に参列しなかった自分を、誰もが非難していると思っていた。
「綺麗になったヒナちゃんを、きっと慶太も見たいと思うから」
陽菜は嗚咽を呑み込んで息を着きながら笑う。
「でも……」

「大丈夫よ、ヒナちゃんが髪を染めた事、慶太には伝えて在るし」
伝わっているわけが無い……。
母親が勝手に仏壇かお墓に向って呟いただけだろう。
それでも母親はその声が彼に届いていると信じているのだ。いや、本当はそんな事在るわけが無い事も知っての行為かもしれないけれど。
それよりも、やっぱり彼女も自分を見ていたのだ。
陽菜が慶太の母親から遠のいたように、彼女もまた迫ることなく遠くから自分を見ていたのだ。
自分の息子が命をかけて守った魂の欠片を拾い集めるように、きっと少しずつ屈折しながらも成長する陽菜を見守っていたのかもしれない。
きっと彼女も、幾度と無く躊躇しながらやっと今、陽菜に声を掛けて来たのかもしれない。
込み上げた涙も嗚咽も堪えきった陽菜の笑顔は、彼女に声を掛けられた時よりもずっと明るく朗らかだった。
小学生の無邪気さが頬に浮かぶ。
「でもあたし、そろそろ黒髪に戻そうかと思って……」
「そうなの？」
「ええ」
言ってしまいたかった。誰かに言ってしまえば、きっと実行に移す事になる。
彼が消えてしまわないうちに、自分を取り戻したかった。
本当の由木陽菜の姿で、慶太と向き合いたいと思った。
「そうね……ヒナちゃんは黒髪が一番似合うかもね」
住宅街に蝉の声が響き渡る。
暑さは感じなかった。
ただすぐ目の前にいる懐かしい面影を背負った彼女の眼差しだけが、熱く胸に染み入る。
「それじゃね」

暖かい笑顔の背中は、やっぱり淋しそうだった。
呼び止めようと思ったけれど、陽菜は再び声を呑み込む。
明日の命日は言われなかった。
慶太のお母さんは、そんな事を話題に出してさり気なく強要するような人ではない。
昔、陽菜の母親が盲腸で入院した時には、何食わぬ顔で由木家の分まで夕飯を作ってくれた。
父親が他人行儀にお礼を言うと「いいの、いいの」と大きく笑って顔の前で手の平をヒラヒラと動かした。
慶太と似て背が高いと思っていた彼女は、何時の間にか陽菜と同じくらいになって、大分疲れたように歳を重ねている。
バス停の前の小さなスーパーから、小さな買い物袋を提げて彼女は去って行った。
陽菜は暫くその後姿から目が話せなくて、目の前をツバメが横切るまで彼女を見つめていた。

第４章―【３】最終話（前書き）

最終話です。
宜しくお願いいたします。

第４章―【３】最終話

陽射しを避ける為にカーテンを半分閉めたほの暗い部屋は、エアコンが唸りを上げている。
テーブルの上に置かれたクヌギで出来た宝石箱を、差し込む陽射しが照らして、乱反射したピアスのクリスタルが天井に光の輪を作りだす。
７月の最後の日、午前中に沙弥から電話があった。
沙弥もあずさも終業式の日に少し話しをしただけで、それ以来会っていない。
何時もより大分ノリの悪い陽菜に彼女達も少し遠慮気味で、時々メールは来たが話すのは久しぶりだった。
久しぶりで三人で映画でも観ようという事になった。当然その後は買い物とカラオケだろう。
陽菜も快くＯＫして電話を切ると、クローゼットから久しぶりによそ行きバリバリの服を物色する。
袖なしチェニックの上に半袖のカーデを羽織って黒髪を手ですくい上げると、ゆっくり落下して肩にサラサラと乗った。
控えめにマスカラを塗って、アクセサリーの入ったクヌギのケースを見る。
ブレスレットとチョーカーを着けて、ピアスは手にしなかった。
強めにかけたエアコンを切って、部屋を出る。
「あら、出かけるの？」
階段を降りると、洗濯物を抱えた母親が声をかけてきた。
「うん。沙弥たちと映画」
「キズ跡も大分なくなったね。やっぱり若いと治り早いのね」
陽菜は母親の言葉に思わず笑う。
「大知は？」
「今から部活みたいよ。まだ外にいるんじゃない」

陽菜がサンダルを履いて外に出ると、大知が自転車のカゴにスポーツバッグを押し込んでいる。
「これから？」
陽菜が声を掛けると、大知は自転車を押して「うん」
二人で小さな庭を歩く。
「姉ちゃん……最近男でも連れ込んでんの？」
門扉の前で大知は立ち止まり、小声で言った。
「な、何よいきなり。そんなわけないでしょ」
「でも、部屋で誰かと喋ってるだろ？」
大知の部屋は陽菜の隣にあるから、夜中に慶太と話しているのが聞こえるのかもしれない。
「電話よ。電話に決まってるでしょ」
陽菜の髪の毛が、ゆるい風で揺れる。
「ふうん……別にいいけどさ」
大知は自転車に飛び乗るようにして勢いをつけると、そのままグングン先に進んで路地を曲がって行った。
陽菜は大知の姿が消えてから、ふと振り返る。
二軒隣の家屋を眺めると、二階の窓に青空が映りこんでいた。
窓がガラリと開いて今にも慶太が大声で声をかけてきそうだけれど、もちろんそんなはずは無い。
飛行機雲がスッと映り込むのが見えて、彼女はホンモノの蒼穹（そら）に目を向けた。
夏雲が太陽を半分だけ隠して、雲の陰が陽菜を覆った。
クシュンっと、小さなくしゃみをする。

「ヒ、ヒナ。髪……」
待ち合わせの船橋駅で改札を出ると、沙弥が声を上げて駆け寄っ

てきた。
久しぶりに会った二人は対照的に変化している。黒髪の陽菜に対して沙弥の髪の毛は茶色から金髪に近い色に変わっていたのだ。
「ヒナ……黒い」
「いいでしょ」
陽菜は髪の毛に触れて「茶色、飽きたし」
「いいなぁ、あたしも黒にしようかな」
後ろから近づいてあずさが言う。
沙弥とあずさはプールに行ったとメールで報告があった通り、小麦色に焼けている。もちろん陽菜も誘われたけれど、その時は行く気にはなれないのでパスした。
金髪、茶色、黒色と三人並んで、久しぶりに盛り上がる雑談に花を咲かせながら、ららぽーとに向って歩き出す。
「ヒナ、やっと元気になった感じ」
「何それ、あたしずっと元気だったよ」
「あ、どっかの男に夢中だったからあたしら排除してたんだ」
「そんな事ないってば」
浜風が三人の髪を揺らしていたけれど、真夏の陽光を浴びる艶やかな黒髪が一番輝いていた。

慶太の墓参りをした日から、陽菜に彼の声は聴こえなくなった。
アレは幻聴だったのか、それとも彼が何処か別の場所に旅立ったのか……。
陽菜が今まで抱えていた後悔や不安や、暗たんとして鬱屈した日々が、慶太の存在となり、声になって聴こえていたのかもしれない。
彼に伝えたかった事を告げることができから……後悔の日々を払拭できたから、慶太はいなくなったのだろうか。
瞳の中にふと映る人影は、何時も彼だった。

息つく間に現れて消える瞬きの中の幻影。
思春期特有とも言うべき戸惑いの中で不安定に揺さぶられる、繊細さと果敢無さ。
それは何かに追いかけられながら喧騒と雑踏の狭間を掻き分けて羽ばたく、スワロウテイル・バタフライ。

――了――

第４章―【３】最終話（後書き）

最後までお読み頂き有難う御座いました。
実は、途中、構成を変えるというあまりやらない事をしてしまい、
生きない登場人物も出てしまいました…（＾＾；
多少なりとも暇つぶしになりましたら、幸いです。
有難う御座いました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3608l/

逆さまの蝶

2010年10月8日11時04分発行